在日韓国人青年生活史調査
재일 한국인 청년 생활사 조사

中間報告書

중간 보고서

在日本大韓民国青年会中央本部

재일본대한민국청년회중앙본부

後援：在外同胞庁

후원: 재외동포청

目次

はじめに 5
1　調査概要 6
1.1　調査の目的 6
1.2　調査設計 7
1.3　本報告書の構成 9
2　生活史の記述 10
2.1　A 氏の生活史：「この人が韓国人でよかった」 11
2.2　B 氏の生活史：「劣等感を持っていたい」 15
2.3　C 氏の生活史：「ウリナラマンセーを浴び続けると私もウリナラの一部、みたいな」 19
2.4　D 氏の生活史：「他の人にも還元ができた時」 23
2.5　E 氏の生活史：「隠すものも何もない」 27
2.6　F 氏の生活史：「話しやすいのも在日のコミュニティやからかな」 31
2.7　G 氏の生活史：「K-POP のブームがあっても、なんか、なんだかな、って感じてた」 36
2.8　H 氏の生活史：「半日本人半韓国人、むしろすごくいい」 40
2.9　I 氏の生活史 ：「国籍と民族は一致しない」 43
2.10　J 氏の生活史：「韓国人やとも、もし日本人とも、もうほんまに 50/50」 46
2.11　K 氏の生活史：「完全日本人寄り」 49
2.12　L 氏の生活史：「なんかいい機会」 52
2.13　M 氏の生活史：「在日ってだけで知り合える、ってことは感謝してる。でもそれだけ」 56
2.14　N 氏の生活史：「プライオリティが自分のなかで上の方に来なかった」 60
2.15　O 氏の生活史：「違いを強みに」 64
3　考察 69
3.1　在日韓国人青年のアイデンティティ形成 69
3.1.1　「関係」を通じたアイデンティティ形成 70
3.1.2　「実践」を通じたアイデンティティ形成 71
3.2　在日韓国人青年の生きづらさ 73
3.2.1　露骨な差別と否定的なまなざし 73
3.2.2　K-POP の流行と在日韓国人の不可視化 75
3.3　民族団体の意義とは何か 76
4　結論 78
補論　「社会調査」における「生活史調査」の位置づけについて 80

はじめに

在日本大韓民国青年会中央本部では、現代の在日韓国人青年の生活実態とアイデンティティを記録し考察するため、「在日韓国人青年生活史調査」を実施している。本調査は、これまでの『第 3 次在日韓国人青年意識調査』『第 4 次在日韓国人青年意識調査』の成果を踏まえつつも、従来の大規模アンケートではなく、一人ひとりの声を丁寧に聞き取るインタビュー方式を採用した点が特徴である。これにより、青年のリアルな姿を立体的に描き出し、それぞれが自らのルーツをどのように捉え、向き合っているのかを明らかにすることを目指してきた。

100 年以上の歴史を持つ在日同胞社会は、世代交代とともに大きく多様化している。かつては差別や偏見といった困難に直面することも少なくなかったが、近年では K-カルチャーの世界的浸透などを背景に、日本社会における在日韓国人への眼差しも変容しつつある。こうした環境の変化のなかで、青年たちの価値観やアイデンティティは複雑に揺れ動いている。本会にとって、彼らの内面を深く理解し、その生きざまを記録することは、現代における本会の存在意義を問い直し、次世代を見据えた組織運営基盤を確立するうえで、不可欠な使命であると確信している。

本冊子は、「在日韓国人青年生活史調査」の中間報告として位置づけられる。今回は 15 名の生活史を抜粋し、その貴重な物語を紹介する。そこにはルーツへの誇りや喜びだけでなく、葛藤や生きづらさも率直に刻まれている。これらは単なる個人の証言ではなく、多様化する在日同胞社会、ひいては多文化共生社会が直面する現実を映す鏡にほかならない。本会では、こうした青年たちの「生の声」を広く社会に発信し、関係団体や地域社会との情報共有を進めることで、多文化共生社会の推進に寄与していきたい。また、本調査を通じて得られた知見を今後の活動に反映することで、本会が社会にとっても在日韓国人青年にとっても、真に価値あるコミュニティとして発展していくための指針としたい。

最後に、本調査の趣旨に賛同し、自らの内面を真摯に語ってくださった在日韓国人青年や調査員の方々をはじめ、すべての協力者に対し、心から感謝の意を表する。本調査はまだ途上にあるが、この中間報告が在日韓国人青年の「いま」を社会に伝える契機となり、多文化共生社会を生きる人々にとっての手がかりとなることを願い、最終報告に向けて調査を邁進していく。

2025 年 12 月 12 日

在日本大韓民国青年会中央本部　会長　李将浩

1　調査概要

1.1　調査の目的

本調査の目的は、インタビューを通じて現代の在日韓国人青年のアイデンティティや生きづらさを捉えることである。在日韓国人の多様化が指摘される現代の在日韓国人青年はどのような生活の背景をもち、また、いかなることを考えて日々を生きてきた／いるのだろうか。ひいては、現代の在日韓国人青年にとって「在日韓国人であること」はどのような意味をもつのだろうか。これが本調査の根本的な問題関心である。

在日韓国人は日本で最も歴史の古い民族集団の 1 つであり、その歴史は 100 年を超えている。この長い歴史のなかで在日韓国人の世代交代が進み、現在では在日韓国人 5 世や 6 世が生まれている一方で、在日韓国人の多様化も指摘されている。すなわち、現在の「在日韓国人」は、必ずしも韓国籍を保持し、両親ともに在日韓国人であり、民族名を名乗り、民族文化を身につけた人びと、というわけではない。韓国にルーツをもつが日本国籍の人びとや、在日韓国人と日本人の国際結婚によるダブル／クォーターの人びと、また、留学や就職を契機とした新定住者の増加により、国籍・出自・生活歴といった面での多様化が著しく進んでいる。

こうした在日社会の変化を受けて、在日本大韓民国青年会（以下、青年会）の構成も大きく変容している。たとえば、国籍を例に挙げるならば、青年会会員数に占める日本国籍の割合は 2014 年には 9%であったが、2024 年には 27%となっている。この変化は、かつて「在日」という言葉が暗黙のうちに前提としていた「共通の経験」や「文化的背景」が、すでに自明ではなくなりつつあることを意味している。つまり、「『在日韓国人である』とは何を指すのか」という問いが、開かれたものとなっているのである。

また、在日韓国人青年のアイデンティティを考えるうえで、日本社会の動向も重要である。なぜならば、近年、SNS や K-POP などを通じて韓国文化に親しむ日本の若者が増えている一方で、在日韓国人青年のなかには「自らのルーツをどう語るか」「他者からどう見られるか」をめぐって揺れ動く姿も見られるからだ。つまり、在日韓国人であることを自己開示する緊張感はかつてよりも軽減したが、在日韓国人青年は「いかに自己／在日を語るか」という新たな問いに直面しているのである。現代では、民族という枠組みは「選び取り・語り直す対象」となりつつあるがゆえに、「いかに語るか」が問われている。そのなかで、在日韓国人青年がどのように自己と他者、社会との関係を構築し、自らの民族性を表出しているのだろうか。多文化共生が望ましい社会規範として称揚されていることを踏まえると、この問いは、在日社会のみならず、日本社会全体にとっても重要であるといえるだろう。

本研究では、上記した現代的な潮流を踏まえて、在日韓国人青年のアイデンティティ形成過程や生きづらさについて注目することとした。そして、これら 2 点をめぐる語りを踏まえたうえで、現代の在日韓国人青年にとって青年会といった民族団体がいかなる意義を持つのか、という点に迫りたいと思う。

もっとも、本調査と類似の問題関心にもとづく調査はこれまでも行われてきた。そのなかでも特に有名なものは、1993 年に福岡安則・金明秀が監修し、青年会中央本部が実施した『第 3 次在日韓国人青年意識調査』（以下、『第 3 次調査』）である。この調査結果をまとめたものは 1997 年に『在日韓国人青年の生活と意識』として東京大学出版会から出版されている。また、2013 年には金明秀監修のもと、『第 4 次在日韓国人青年意識調査』（以下、『第 4 次調査』）も実施されている。これは『第 3 次調査』で得られた知見をアップデートしようとしたものであり、20 年の間に在日韓国人青年がいかに変化したか／しなかったかを示そうとしたものである。これらはともに、厳格な統計的手法にもとづいた大規模調査を通じて、在日韓国人青年の現実を詳らかにした重要な業績である。

一方で、『第 3 次調査』と『第 4 次調査』は、アンケート調査であったがゆえに、個々の在日韓国人青年の「生の声」を拾い上げることができたとは言いがたい。これは、両調査が在日韓国人青年の意識の全体像を把握するという目的であったため、いたしかたない部分ではある。しかしながら、現代の青年たちは、かつてよりも一層多様化・複雑化した生活世界を生きている。統計的傾向からは見えてこない「生活の文脈」や「感情の揺らぎ」を明らかにするためには、現代を生きる在日韓国人青年の語りに耳を傾ける必要があるだろう。そこで、本調査はアンケートではなくインタビューを軸として進めてきた。

また、調査手法の変更は本調査の名称にも関わっている。本来であれば、従来の調査名に則って『第 5 次在日韓国人青年意識調査』とするのが妥当だろう。しかし、本調査ではインタビューを通じて語られた一人ひとりの人生の歴史（＝生活史）を重ね合わせることで、現代の在日韓国人のあり方を捉えることに主眼をおいている。このことが、本調査の名称を『在日韓国人青年生活史調査』とした所以である。

本調査が目指すのは、在日韓国人青年一人ひとりの「声」を記録し、時代を超えて共有可能な記憶／記録として残すことである。こうした試みが、これからの在日社会の姿を考えるうえでの新たな出発点となると考えている。

1.2　調査設計

（1）対象者

調査は主に青年会に参加経験のある人びとや民団の行事に参加した経験のある人々

を対象として行った。調査員の個人的なネットワークを頼りにインタビュー対象者を選定し、調査を進めた。表 1 は対象者の基本データをまとめたものである。調査期間は 2025 年 6 月から 2025 年 12 月までである。

表 1　対象者基本データ

対象者	年齢	性別	出身地	現住地	国籍
A 氏	20 代後半	女性	東北地方	東北地方	日本
B 氏	30 代前半	男性	関東地方	関東地方	韓国
C 氏	30 代前半	女性	近畿地方	中部地方	日本
D 氏	20 代後半	女性	近畿地方	近畿地方	韓国
E 氏	30 代前半	男性	中国地方	中部地方	日本
F 氏	20 代後半	女性	近畿地方	近畿地方	韓国
G 氏	20 代前半	女性	東北地方	東北地方	韓国
H 氏	20 代前半	男性	韓国	関東地方	韓国
I 氏	20 代後半	女性	近畿地方	関東地方	日本
J 氏	20 代後半	女性	近畿地方	近畿地方	日本
K 氏	20 代前半	女性	東北地方	東北地方	日本
L 氏	20 代前半	女性	関東地方	関東地方	二重
M 氏	20 代後半	男性	中部地方	関東地方	日本
N 氏	20 代後半	男性	関東地方	関東地方	韓国
O 氏	30 代前半	男性	九州地方	関東地方	韓国

（2）調査方法

調査は対面もしくはオンラインで行った。1 人あたり 1 時間 30 分から 5 時間程度の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、家族の来歴や自身が在日韓国人であることを知ったのはいつか、被差別経験の有無、なぜ青年会に参加するようになったのか、在日韓国人でよかった／嫌だったと思うことは何か、現在のアイデンティティ状況などを尋ねた。

原則的に対象者の生活史に即して上記の点について聞き取りを行った。その点において、本調査は生活史調査として位置づけることができる。ここで簡単に生活史調査というものについて説明しておこう。生活史調査とは、対象者が生まれてから現在までの人生の歴史（＝生活史）を聞き取るものである。アンケート調査とは異なり、長いタイムスパンで対象者の考えや経歴を聞くことができるという点に特徴がある。そのため、アイデンティティや民族に対する考え方がいかにして変化したのか、という

点を捉えるにあたって有効な手法である。なお、「生活史調査」ひいては「社会調査」に関する簡単な説明を本報告書の末尾に補論として記しておくため、興味のある方はご参照いただきたい。

1.3　本報告書の構成

最後に本報告書の構成について説明する。本報告書は大きく 4 章に分かれている。調査の目的や調査設計について説明した 1 章に続き、2 章では調査によって得られた生活史を列挙する。今回は中間報告書という位置づけであるため、全ての生活史を記述するのではなく、15 名分を抜粋している。15 名を選定するにあたっては、在日韓国人青年の多様性を理解するために相互に異なる論点を有していることに留意した。表 1 を見てもわかるように、今回の報告書では女性の事例が多いという偏りが出ている。これは、あくまでも事例を選定する過程で結果として出てしまった偏りであり、在日韓国人の経験を性差という観点から考察したわけではないということをあらかじめ断っておきたい。また、紙幅の関係上、聞き取り内容を 1 名あたり 3〜5 頁ほどに圧縮せざるを得なかった。

2 章には対象者の生活史を記している。編集の方針としては「データ」として提示するだけではなく、それぞれの人生の「物語」としての面白さ／興味深さを担保できるよう心掛けた。2 章は本報告書の中核となる部分であるため、ぜひ一人ひとりの生活史を読み込んでいただきたい。

3 章では、2 章の内容を踏まえ、在日韓国人青年のアイデンティティや生きづらさ、そして現代社会における民族団体の意義について暫定的な考察を行った。中間段階であるため「要約的」な部分も残るが、全体の方向性を示すうえでの試論として位置づけている。そして最後に 4 章では、現代の在日韓国人青年にとって、「在日であること」がいかなる意味をもつのか、という点について、これまでの成果をもとに初歩的な回答を提示する。

2　生活史の記述

本章では、「在日韓国人青年生活史調査」において得られたインタビュー記録のなかから、15 名の生活史を紹介する。これらの語りは、単なるデータやエピソードの集積ではない。そこには、青年たちがそれぞれの環境のなかでどのように自身のルーツを受け止め、他者と関わり、生き方を模索してきたのかという、時間をかけた思考と実践の軌跡が刻まれている。言い換えれば、本章は人びとがどのようにして「現在」に至ったのかという過程を描き出す試みである。

前章で述べたとおり、在日韓国人社会は世代交代とともに著しく多様化し、かつてのように血統や国籍、文化的慣習といった指標のみによって語ることは難しくなっている。そのなかで、青年たちは「在日韓国人として生きるとは何か」という問いを、あらためて自分の人生のなかで引き受けざるを得なくなっている。ある者は言語や家庭内の文化や留学経験を通じてその問いに向き合い、ある者は友人関係や地域社会での経験を通じて自らの立ち位置を考える。こうした日常的な実践が、アイデンティティを形づくっている。

インタビューでは、出自を知ったきっかけや家族との関係、学校での経験、社会に出てからの出会いや葛藤、そして青年会・民団との関わりなどを中心に語ってもらった。語りの調子は人によって異なり、軽やかに笑いながら話す人もいれば、沈黙をはさみながら慎重に言葉を選ぶ人もいた。そのどれもが、個人の記憶であると同時に、時代と社会を映し出す鏡である。

本章を通して浮かび上がるのは、「在日韓国人であること」を一様に定義することの難しさであり、その多様性こそが在日社会の現実であるという事実である。次のページから紹介する生活史の一つひとつが、読者にとって、在日韓国人青年の現在を理解するための手がかりとなることを願っている。

2.1　A 氏の生活史：「この人が韓国人でよかった」

> A 氏：在日としてのアイデンティティって括られると疑問があって、やっぱり今でも思うのは単純に母親が韓国人。アイデンティティがあるかないかって言われたら、ない。[…]なにか 1 つ名前とか、韓国って分かるものがあればまたちょっと違う認識だったかもしれないですけど。

「在日としてのアイデンティティはありますか」という質問に対して、A 氏は上記のように答えた。一方、A 氏は地方本部や中央本部で執行部として活躍してきたという背景がある。アイデンティティが希薄であるにもかかわらず、なぜ A 氏は青年会の活動に強くコミットするのだろうか。彼女の生活史を追うなかで、この問いに答えていきたい。

1　母と育った日々――「違い」を気にしない子ども時代

A 氏は東北地方で生まれた現在 20 代後半の女性である。父親が日本人で母親が韓国人のダブルで、彼女の国籍は日本である。兄が 2 名、妹と弟が 1 名ずついる。母親は父親と結婚する際に日本にやってきたという。彼女は母親について「ザ・韓国人って感じでスキンシップもすごいし、言葉も、すごくポジティブな言葉ばかり言う人」だと語る。

自身が韓国にルーツがあることを知ったのは小学 3 年生くらいのころだったという。A 氏の周囲の友だちの多くは彼女がダブルであることを知っていた。A 氏の兄の学校の授業で、A 氏の母親が呼ばれ韓国について説明をする、ということがあったからだ。そして、兄伝いで「もう、周りは私の家が韓国ってことは知ってた」ようだ。彼女は特に周囲と違うことに対して悩むということもなく、「そういえばお母さんよく韓国行ってるな、とか、そういう程度で、自分が一人だけ違う、とかそういうのも感じたことがなかった」ようだ。

新規定住者の子どもの場合、授業参観に親が来るのが恥ずかしかった、という語りを聞くことが少なくない。子どもが、片言の日本語を話す親をコンプレックスに感じる場合がしばしばあるからだ。しかし、A 氏の場合はそのようなことはなかったようだ。「うちの母親ってやっぱり天然で、私が授業参観で寝てたりすると、『起きて』ってボールペンで叩かれたり」「いまでも同窓会でそんなことあったね、って話になる感じで、プチ有名人というか面白い母親みたいな」と語る姿には、母親をコンプレックスに感じている様子は一切示されていない。

A 氏が生まれ育ったのは外国人がほとんどいない地域であった。実際に、彼女は小学校や中学校は地元でマンモス校と呼ばれる全校で 1000 人ほどいる学校であったが、

韓国人やダブルの児童・生徒とは出会わなかったという。小学校のころには、同級生の多くは A 氏がダブルであることを知っていたと前述したが、中学では多くの児童が同じ学校に持ちあがるため中学生になっても同様の状況であった。周囲を日本人に囲まれた生活であったが、「いじめとか、いやな思いとか、そういうのは全然なかった」と振り返っている。

中学を卒業した後、A 氏は都市部の商業高校に進学する。「ドラマの『ショムニ』を見て、OL に憧れてて、早く働きたい」と思っていたようだ。当初、高校で新しく出会った同級生は A 氏がダブルであることを知らなかった。しかし、「韓国に住んでる母親の親戚から送ってもらった韓国のペンケース使ってたら、珍しいみたいになるじゃないですか、それで説明したり」というように、日常のなかで自己開示することがあったようだ。

2　社会との接触と青年会との再会――「共感できる場」を見出す

高校卒業後、A 氏は地元の企業に就職する。青年会に参加するようになったのはこのころである。ここまで説明していなかったが、彼女は小学生のころに地元の民団が主催するオリニ学校に参加していた。そして、その時の名簿が残っており、A 氏に声がかかったのである。A 氏に声をかけてくれたのは、彼女がオリニ学校に参加していた時に運営スタッフとして青年会として活動していた女性であった。

A 氏が初めて青年会に参加したイベントは 4 月のお花見であった。彼女はその時のことを「楽しかった」と振り返る。この感想は月並みであるが、当時の彼女の状況を踏まえると見え方が変わる。というのは、彼女が就職した会社の先輩に韓国を嫌う人がおり、「韓国が嫌いって話をずっと聞かされていた」という背景があるからだ。彼女はそれに対して、「やっぱり親には言えない。心配もさせるし」と思う一方で、「周りには日本人の友だちしかいないので話しても『大変だね』って感じで、共感っていう感じではなかった」という。そのなかで青年会は「悩みを聞いてくれるし、共感してくれる場があるんだってなりました」という。加えて、「高校生と社会人の〔周囲の環境の〕変わりっぷりが私にとって大きくて、韓国についてバーッて言われて、けなされるみたいな感覚が初めてで。そのなかで、それを同じ境遇で共感できる場があったっていうのは自分のなかですごくプラス」だったともいう。つまり、彼女にとって青年会は、親には話せないが、在日韓国人でなければ理解できない悩みを共有し、共感し合える場として機能していたのである。

18 歳で青年会に参加した A 氏であるが、参加してから 1 年と経たずに代表監査に就任する。当時の代表監査が転居したのがきっかけである。彼女はその時の心境について「みんなが困ってるんだったら、私がやりますよっていう軽い気持ち」だったという。また、当時の地方本部会長の家で会員が合宿をすることがしばしばあったという

が、「そういうのも増えるんだなって思って、それも楽しかったし、やってみようかな」と思ったという。

3　母の言葉と「愛情」としての民族性

代表監査の任期が終了したあとには、副会長に就任する。当時、A 氏は「次は会長にならないか、って話が来るって分かってたんで、今度はもうやらないでおこうって思ってたんです」と語る。実際に、当時の会長が急遽退任することになり、臨時で会長をしないかと声をかけられる。上記のように A 氏は地方本部会長を断ろうと考えていたが、最終的に引き受けることとなる。彼女はその時の心境の変化について以下のように語る。

> A 氏：〔A 氏が副会長を務めていた時期に〕母親が病気になって、私が 22 歳の時に亡くなってるんですね。その時は半年くらい青年会に行ってなくて。[…]〔その後、臨時会長の誘いがあった時は〕やらない、って思ってたんですけど、母親が、亡くなる前にやっぱ私が副会長してたので、「多分そのうち会長になるんじゃないかな」って私が話してたら、「会長ってかっこいいよ。ママはやってほしい」って言ってたので。なんだろ、その言葉が後押ししてくれたというか。[…]母親に対する恩返しじゃないですけど、そんなこと言ってたな、みたいな。

紙幅の関係上、地方本部会長以降の彼女の青年会での来歴については省略する。概略的に述べると、中央執行委員や常任委員を歴任し、現在は地方本部の監査を務めている。

さて、冒頭の問いに戻ろう。アイデンティティはない、という彼女が青年会の役職を引き受けてきたのはなぜだろうか。彼女は冒頭の語りに続けて「やっぱり〔青年会の〕みんなが好きですし、この場所が好きですし、だからやってこれた」と語る。彼女にとって青年会は、オリニ学校のころに出会った先輩と再会し、また、他の場では語ることができない悩みを同じ境遇という目線から共感し合える人びとがいる空間であった。彼女の「この場所が好き」という言葉には、他者との出会いの履歴や、日本社会とは異なる社会空間であるがゆえに得ることができる安心感が大いに関係しているのである。

一方、A 氏は「アイデンティティはない」と語るが、このことは彼女が在日韓国人であることを拒絶し、ルーツを否定しようとしていることを示しているわけでは決してない。実際にはその逆である。そしてそこには母親の存在が深くかかわっている。以下の語りにはそれが如実に表れている。

A 氏：母親はすごい愛情、愛にあふれた人だったので私もすごく大好きで、家族もみんな、大好きで。[…]多分、母親が韓国人だったとしても、もし嫌な母親だったら全然、感じ方とかは変わっていると思いますし、そういう意味で、母親が韓国人でよかったな、というか。母親が母親でよかったな。本当にこの人でよかったな。この人が韓国人でよかったなっていうのは、すごく感じます。

A 氏の生活史を民族という観点から眺めると、「愛情」ともいえる感情がキーワードとなっている。幼い時からよくしてもらった先輩への愛情、社会人になったばかりのころに悩みを共感してくれた人びとへの愛情、そして母親への愛情。「国家」や「民族」といった抽象的な共同体ではなく、日々の暮らしのなかで育まれた他者への愛情が、現在の彼女の民族に対する肯定的な感覚を支えているのである。

2.2　B 氏の生活史：「劣等感を持っていたい」

> B 氏：在日としてのアイデンティティで言うと、在日だからっていう劣等感は持っていたいな、とは思う。卑屈になる劣等感じゃなくて、美しい劣等感というか。[…]俺の人生逆境もあったけど、それをはねのける、なんというか、反骨的な劣等感。そういうのは持っていたい。

インタビュー終了直前、B 氏は上記のように語る。「在日だからっていう劣等感は持っていたい」という語りは、一見すると不可解なように思われるが、彼にこのように言わしめる背景にはどのようなものがあるのだろうか。

1　幼少期の衝撃――「違い」を知らされる瞬間

B 氏は 1980 年代に関東地方で生まれた男性である。両親と祖母、妹 2 名の 6 人家族であった。両親はともに韓国籍で、彼自身も韓国籍である。彼が生まれた地区は「ぽつぽつといた」環境だったが、同級生には在日コリアンはおろか、外国にルーツのある子どもは 1 人もいなかった。

生まれた時から民族名を使用していたため、自身が在日コリアンであることは自然と知っていた。日常的な場面で言えば、たとえばお風呂に入ると家族から「1 から 10 まで日本語で数えて、その次は韓国語で数えて、それから上がるよう言われてた」と語っている。B 氏はこうした家庭環境を「そういうもんかな」と特に疑問に思うことなく受け入れていたという。

しかし、小学校に入学してから、自身の民族性に対する認識が変化する。そのきっかけは、小学校の入学式で同級生から「変な名前」と言われたことである。また、小学校入学直後には「6 年生が 10 人くらい集まって、『お前韓国人だろ』とか言われてボコボコにされた。顔面血だらけ」といったこともあった。これらの経験によって、それまで当たり前のように受け止めていた自身の民族性を「違和感」として受け止めるようになる。B 氏は「小学校に入学してから、自分は他の人と違う。そしてそれはいい違いではないって気づいた」と語る。

在日韓国人であることをからかわれたりする経験は、中学生になってからも続く。たとえば同級生から「『今朝テレビでお前見たよ』って言われて、どういうことかと思ったら『あ、韓国の大統領だったわ』みたいな。陰湿な感じで言われた」という。小学生のころのように、露骨な暴力を振るわれることはなくなったが、陰湿なからかいを受けることがしばしばあったという。

このように、B 氏は小中学校の間、在日コリアンであるがゆえに差別を受けるという経験がしばしばあった。こうした経験は民族性に対する劣等感を募らせたと考えら

れるが、親身になって寄り添ってくれたのが母親である。時には職員室に直談判に行き、彼の学校生活が改善するよう手を尽くしてくれたのである。そして、彼の民族的な劣等感を払拭するきっかけをもたらしたのも母親である。母親は彼の中学の卒業式にチマ・チョゴリで出席し、保護者代表挨拶を述べたのである。B 氏はその時のことを以下のように語る。

> B 氏：保護者代表挨拶で母親がピンクのチマ・チョゴリで。もう卒業生より目立ってるわけよ。男子は「あれって B の母ちゃんじゃん」とか言って、女子は「きれい」とか言ってて。あの時は母親に「やるじゃん」って思ったね。母親も「何も恥ずかしいことじゃない」って言ってて。そういう姿はかっこいいって思う。

中学卒業後、B 氏は地元の高校に進学する。そこで恋人ができるが、「この彼女が束縛が激しくて」「最終的に『私以外と連絡とらないで、遊ばないで』って感じ」だったという。当時、B 氏は中学時代の同級生とバンドを組んでいたが、これも彼女がバンドメンバーに「私の B だから。バンドとかくだらないから B をやめさせて」と直談判し、脱退することになる。彼は高校時代のことを「彼女に振り回されて友だちなくしたやつってレッテル貼られて、ほんとに孤立していた」という。

2　孤立と再接続――奨学会と青年会の中で見つけた居場所

このように、B 氏は高校では恋人との関係が原因となり、友人がほとんどいない状況であったが、加えて、高校でも民族差別を経験することがあった。B 氏は最も辛かった経験として自身の机にチョークで「金正日死ね」と書かれていたことを挙げる。当初、誰がこのようなことを行ったのか不明であったが、学校で調査したところ、非常勤講師が行ったと判明したのである。B 氏はこの時、「学校に味方が誰もいない」と感じたという。そのうえで、「それまでは同級生とか、子どもからそういうことをされることはあった。でも、大人が、学校の先生がそんなことするって知って、誰も信用できなくなった」と語る。

このように、B 氏の高校での学校生活は孤立したものであった。しかし一方で、彼の支えになっていたコミュニティもある。それが朝鮮奨学会である。朝鮮奨学会では年に数回、全国の奨学生が集まり、夏季合宿や文化祭を行う。彼はそこで全国の在日韓国人との友人関係を育んでいた。こうしたコミュニティの存在は「俺の高校生活での数少ない支えになってた」のである。いわば、B 氏にとって朝鮮奨学会コミュニティの存在は、孤立した学校生活を補填する人間関係の源泉となっていたのである。

B 氏が本格的に青年会に参加したのは 20 代半ばのころである。当時、B 氏が参加し

ていた地方本部は「親戚とか兄弟で参加している人がいるから、独特な身内ノリというか、なんとなく閉鎖的な感じがしてた」という。B 氏は当時の地方本部会長から声をかけられて執行部になるが、彼の目から見ると会長は「あまり青年会に積極的じゃないというか、会長めんどくさいみたいな感じだった」という。

青年会に加入した時の B 氏は、フリーターとして職を転々としていた。当時の彼にとって青年会は、「自分に他の人とのつながりがないなかで、ここ〔青年会〕は俺の居場所になる」という場所だった。そのため、執行部としての活動に意欲的であったが、「全国イベントがあっても、うちの地方はうちの地方だけで固まってる」「俺は奨学会のつながりでいろんな人と交流してたけど、ほかの人が関わりを持とうとしないところに嫌気が差して」しまい、青年会活動に意欲がなくなり、離れてしまう。

もっとも、青年会活動から離れてしまった後も、在日コミュニティとの接点が一切なくなったわけではない。B 氏は日本人の三味線奏者とともにチャンゴの演奏活動を行っており、民団が開催するマダンなどに演者として参加していた。そのなかで青年会の人びととの交流が部分的に維持されていた。そして、青年会活動から離れて 10 年が経ったある時、マダンを通じて仲よくなった青年が地方本部会長に就任した際、「B さんに戻って来てほしい、ってそいつが言うわけ。それがすげー嬉しくて」再度青年会に参加するようになったのである。

先に、「青年会は自分にとってのつながりがないなかで、ここはここで俺の居場所になる」という語りを引用したが、B 氏が 10 年ぶりに青年会に参加した時期もまた、彼の人間関係が失われた時期であった。というのが、彼は 7 年間続けていたバンドを脱退し、加えて「元メンバーが SNS で俺のことをめっちゃ悪く言っていて、バンド界隈に居られない」ような状況に陥っていたのである。彼は当時の状況を「はっきり言って精神的に一番限界。何もできない状態」だったという。すなわち、B 氏にとって青年会は失われた社会関係を再度獲得するための場として機能していたのである。実際、彼は「B さんに戻って来てほしい、って言われた時は、すごいどん底だったけど、自分を変えるチャンスなのかもしれない」と思ったという。そしてそのうえで、「自分の人生にとって大きなきっかけだったと思う。自分のことを知らない人たちとの関わりのなかで、少しずつ自分を取り戻せる」と思い、青年会に参加しているという。

3　「美しい劣等感」という生き方

ここで冒頭の B 氏の語りを再度引用しよう。

> B 氏：在日としてのアイデンティティで言うと、在日だからっていう劣等感は持っていたいな、とは思う。卑屈になる劣等感じゃなくて、美しい劣等感というか。[…]俺の人生逆境もあったけど、それをはねのける、なんというか、反骨的な

劣等感。そういうのは持っていたい。

学生時代に受けた民族差別の経験を見ると、彼は「在日だからっていう劣等感」を持たざるを得ない環境であったように思われる。しかし、そんな彼を支えてきたのは、民族を恥じない母親の姿や朝鮮奨学会といった在日コミュニティであった。彼の辛い経験は「劣等感」を抱かせざるを得ないが、周囲の支えによって「卑屈になる劣等感」にならなくて済んだといえるだろう。

社会人になってからも彼の人生には逆境がしばしば訪れた。それは周囲との人間関係が失われる、というものである。そして、青年会は B 氏にとって、失われた社会関係を補填する場として機能していたのである。彼にとって民族は、結果として人生の逆境を「はねのける」ための資源になっていたということができるだろう。もっとも、現在では「在日として」よりも「何人でもない」というのが偽らざる感覚だという。

B 氏の前半生は「民族の苦しみ」との対峙であった。しかし現在では、「民族の歓び」を享受している。そのようにまとめることができるのではないだろうか。

2.3　C 氏の生活史：「ウリナラマンセーを浴び続けると私もウリナラの一部、みたいな」

1　知らされなかった出自――自身のルーツを知る時

C 氏は 1990 年代に近畿地方で生まれた女性である。母親が在日韓国人で、父親は日本人である。彼女自身は日本国籍である。先祖がいつ日本に渡ってきたのかは定かではなく、少なくとも C 氏が在日 3 世以降であるということしか分からない。家庭には在日特有の文化はほとんど残っておらず、日常的に韓国料理を食べたり、チェサを行ったりということはなかったという。

こうした家庭環境であったためか、自らが在日韓国人の家系に生まれたことを知ったのは遅く、大学 3 年生の時であった。パスポートを申請する際に、戸籍謄本を取り寄せたところ、母方の祖父母の名前が民族名で記載されており、初めて自身のルーツを知った。彼女はそれまで自身の出自について家族から説明を受けたことはなく、また、現在までも「なぜ出自を教えてくれなかったのか」と問い質すこともなかったと言う。両親が出自を教えなかった理由として、おそらく「言う必要がないから言わなかったんじゃないか」と推測している。

C 氏にとって出自の「発見」は、喜びというより戸惑いに近かった。彼女は「知らなかったということ自体がショックだった」と振り返る。当時の彼女にとって、韓国は「ニュースであまりいい話題を聞かない国」という印象であったからだ。彼女はこうした感情について以下のように語っている。

> C 氏：自分のアイデンティティとかそういうのに関わるものだから、なんで話してくれなかったんだ、っていうのもありますし。[…]ネットとかでも、当時って韓国に対するいいニュースとかあまりなかったじゃないですか。だから、なんか自分のなかでも、あんま韓国っていい国じゃないんじゃないかみたいなのもあったんです。でも、自分に韓国の血が入ってるって分かってたらニュースの受け止め方も変わるじゃないですか。そういうのもあって、なんで言ってくれなかったんだろう、って。

C 氏が語る「知っていたらニュースの受け止め方も変わった」という言葉は、「民族とは何か」の一端を伝えるものである。一般論として、民族は文化や血統の共有、または、それらの共有にもとづいた「われわれ意識」によって定義される集団である。しかし、彼女の語りは、民族が世界をどう感じ取るかという「視線のあり方」「世界の見え方」としての側面を持つことを示唆する。すなわち、彼女にとって在日であることは、過去に遡って発見されるルーツであると同時に、自らの世界の見え方が変わる契機でもあったのだ。

2　学びと実践――言葉・歴史・共同体との出会い

自身が在日韓国人のルーツを持つと知ってからも、C 氏は特に韓国に対して強い興味を抱くことはなかったという。しかしながら、2年ほど前から韓国語教室に通い、韓国語を学ぶようになる。彼女は、その理由を「ドラマとか見て、勉強してみようかな、って思うようになった」というが、一方で「韓国の血が流れているのに喋れないのが恥ずかしい」と感じた、ということもある。そして、韓国語を学習するなかで、通っていた教室がスポンサーをするスピーチコンテストにも出場したという。

また、韓国語を学習するなかで、C 氏の関心は在日の歴史にまで広がっていった。「在日の歴史も勉強したいって思ったのが、それこそ韓国語勉強して 1 年ぐらい経ったころから」と語り学び始めたのだという。こうした学びの過程は、ドラマといったサブカルチャーを入り口に、在日史といったより本格的な内容へと移行していくモデルケースといえるだろう。

C 氏が青年会に参加したのは、2024 年に開催された母国訪問がきっかけである。当時住んでいた地域の民団の SNS をフォローしており、そこで母国訪問について情報を得たのである。大学生のころから行ってみたいと思っていた DMZ にも行くことができ、総じて楽しいイベントだったと語る。

他方で、母国訪問は彼女が在日韓国人に囲まれる空間に初めて参加した経験でもあり、驚くような場面もあったという。たとえば、「みんな割と周りに何世ですかって聞いたり、初めての人と話す時にそういうことを聞かれたりするから、話題のチョイスとかがやっぱりここは在日社会なんだなって思います」という。また、国民儀礼での国歌斉唱について「国籍はやっぱ日本なので日本人じゃないですか。なのに、なんでウリナラマセーって歌ってるんだろみたいなのはあったりします」と語る。

もっとも、これらの語りは参加したばかりのころの「驚き」を伝えるものであり、青年会への参加を継続するにつれて心持ちが変化した側面もある。実際に、インタビューを行う直前に参加した青年会東京での勉強会での自身の言動を振り返りながら、以下のように語る。

> C 氏：前も勉強会で、いろんなテンションで、私は日本人ですって言ったんですけど、確かに日本人ではあるんですけど、なんか、韓国のルーツがあることは間違いないから、そういうところも大切にしようねみたいな、そういう気持ちはこう芽生えたというか。ウリナラマンセーを浴び続けると私もウリナラの一部みたいな。そういう気持ちになってきたところはあります。

この語りには、C 氏が民族的な実践を通じて、在日韓国人に「なる」過程を読み取

ることができるように思われる。すなわち、実際に青年会といった在日コミュニティに参加し、国民儀礼や国家斉唱を行うことは、彼女にとって自身のルーツを再認識する契機になったのではないだろうか。もちろん、青年会に参加するまでも、C 氏は事実として自身の在日韓国人のルーツを認識していただろう。しかしながら、民族的な実践を行うことは、事実としての認識だけではなく、これまで遠いものだった「韓国」との繋がりを身体的に感じる瞬間でもあったのではないだろうか。

もっとも、「韓国」との繋がりを感じる機会が増えたからといって、彼女が在日韓国人としてのアイデンティティを確立することができたというわけではない。在日韓国人としてのアイデンティティがあるかと尋ねたところ、「それはあまりなくて、やっぱり日本人」と答える。この点については、「たとえば民族名を持っているんだったら、在日なんだなっていうことは感じると思うんですけど、やっぱり基盤が日本にあるのと、文化がもう日本だと、日本人かなってのがありますね」と説明する。一方で、これは自身の在日韓国人としてのルーツを否定するものでは決してない。「ただ、やっぱり在日という視点も大事。大事にしたいなっていうのは、心のなかにはあります」と語るように、彼女は「日本人である自分」と「韓国の血をもつ自分」の両方を意識しているのである。

3　歴史の記憶を今に生きる――青年会への批評と希望

ここまで、C 氏の生活史について紹介してきた。彼女にとって、青年会は自身のルーツを再認識する場として機能していたことがわかる。一方で、現在の活動内容に疑問を感じる場面もあるという。これが語られた一連の流れを以下に提示しよう。

> 筆者：C さんって結構勉強にも関心あるじゃないですか。でも青年会って遊びのイベントが多いですよね。そういう点についてはどう思いますか？
>
> C 氏：よくないと思いますよ。[…]民団の歴史があるじゃないですか。やっぱり、在日が差別されてきたっていう過程があって、そのなかで、指紋押捺拒否運動あって、そういう歴史があるなかで、青年会って 1 世、2 世、3 世の人たちがやってきたことを受け継がないといけない団体ではあるじゃないですか。[…]今でこそ韓流ブームとかもあって、韓国人とか在日に対する差別ってある程度なくなってきてますけど、まだ目に見えない差別とかはあるし。やっぱり差別に対する権利団体っていうのは、存続していかないといけないから、そういう意味でも、そういう方面の意欲を高めるようなことも大事なんじゃないですかね。

ここで語られているのは、青年会の存在意義は何か、という問いである。C 氏は青

年会を在日韓国人の歴史のなかに位置づけることで、差別への対応や権利団体としての性格を重視している。しかし一方で、現在の活動内容ではそうした意識が醸成されていないため、疑問が生じているのである。もっとも、C 氏は「遊び」といった側面を完全に否定しているわけではない。「すごい通り一辺倒な言い方ですけど、やっぱりここでしか出会えない仲間、みたいなのはありますもんね。そういうのも大事だっていうのはよくわかる」と語る。

彼女は「指紋押捺拒否運動」などに言及しているが、このことは、青年会が社会運動を行うべきである、と言いたいわけではない。彼女は青年会のビジョンについて、「今の青年会って方向として、多文化共生とか言ってるじゃないですか。それは素晴らしいなと思う」という。そのうえで、かつての在日韓国人の社会運動と比較しつつ、「昔の民団って参政権とか指紋押捺とか、どっちかって言えば戦おうみたいな感じだったじゃないですか。でも今って社会の流れ的には、そっちより、みんな外国人と共生しようみたいな感じだから、運動から転換してるのは、すごくいいなっていう風に思いました」と語る。

彼女の青年会に対する批評には、歴史の記憶と今の社会をどう結びつけるか、という論点を見出すことができる。かつての運動の歴史を踏まえつつも、共生をめざす新しい方向性を好意的に捉える彼女のまなざしは、在日の歴史と現在を架橋する試みを考えるうえでも示唆を与えてくれるものである。

また、過去と現在を架橋しようとする姿勢は、彼女の生活史とも部分的にオーバーラップしているように思われる。C 氏の語りにおいて、「大学 3 年生の時に出自を知った」というできごとは、単なる事実の発見ではなく、語られなかった過去を現在の自分へと接続する契機であった。たとえば、韓国語学習や青年会への参加は、語られなかった自身の民族性を充填する試みであったと考えることもできるだろう。彼女が青年会に対して「遊びばかり」と違和感を語るのも、そこに過去と現在をつなぐ物語の不在を感じるからかもしれない。

民族とは、彼女にとって、血統でも国籍でもなく、忘れられた時間を現在に呼び戻すための実践である。C 氏の語りには、そうした「過去と現在を結ぶ」在日のあり方を読み取ることができる。

2.4　D 氏の生活史：「他の人にも還元ができた時」

1　家族のなかの継承

D 氏は 1990 年代、近畿地方で生まれた女性である。両親はともに韓国籍で、彼女自身も韓国籍である。曾祖父が日本へ渡っており、彼女は在日 4 世である。祖母の話によると、D 氏が生活していた市内には朝鮮学校が存在し、地域内には多くの在日家庭がいたという。親戚の多くも同地に暮らし、韓国語講座や民団支部活動も行われていたため、在日韓国人同士のつながりが比較的保たれていた。

家庭内には韓国文化の要素が自然に存在していた。祖父が長男であったため、チェサが毎年欠かさず行われ、鳥一羽を用意して果物やおかずを並べ、祖先を祀る儀礼を丁寧に続けてきた。祖父母は簡単な韓国語を話し、家には韓国風の飾りや料理が並び、子どものころの D 氏とってはそれが家庭の風景であった。

自らが在日韓国人であると知ったのは小学校 4 年生の時である。夕食中、兄弟との会話のなかで祖父母が「日本人ちゃうで、韓国人やで」と言ったことがきっかけだった。これを聞いた彼女は驚きながらも嬉しく感じ、翌日学校で「私、韓国人やねん」と友人に話したという。彼女にとってその発見は「特別なこと」であり、嬉しさを伴うもであった。

祖父母は民族意識が強く、民団に所属して団費を納め、家には民団新聞が届いていた。祖父は民団制作の DVD を D 氏に見せ、「自分のルーツを知っとかなあかんで」と語っていたという。これをみると、チェサを始めとした家庭内の文化と、祖父とともに過ごした時間が、D 氏が民族に関心を抱くようになった重要な要因であったと考えられる。

一方、両親の世代では民族への関心が薄れ、母は「できるなら帰化したい」と語り、父は「在日として嫌な思いをしたこともあるが家系は大事にしたい」と考えていたようだ。家庭内でも、民族意識の強い祖父母世代と、距離を置く親世代との間にギャップがあった。もっとも、D 氏が中学生のころに父親が韓国語を学習し始める、ということもあったようだ。

> D 氏：私らがちょっと勉強して、これ韓国語やけど意味わかる、とかってお父さんに問題出すってこともあったりして。[…]で、私が中学校とかなって、KARA とかが出てきた時に、可愛いなって言ってお父さんも韓国語を勉強しに行こっかなって言って、民団のところに通ってたんですよ。もう 40 何歳の時で。それで通い出したのはありました。

この語りを見ると、父親が韓国語を学び始めた理由は K-POP への関心を直接的な契

機としているように思われる。しかしそれだけではなく、D 氏が韓国語を勉強していたため、家庭内で「韓国語」というものが身近なものとして扱われていたため、韓国語を学び始めることへのハードルが下がっていたという側面もあるのではないかと考えられる。

2　名前をめぐる選択――日本名と民族性を両立する戦術

D 氏は小学校のころから日本名を使用していたためが、前述したように友人に自身が在日韓国人であることを公言していた。そのため、小・中学校の同級生の多くは彼女が在日韓国人であることを知っている。また、高校では、在日であることをクラス全体に公言することはなかったが、親しい友人には早い段階で打ち明けていた。彼女のなかには「無関係な人に言う必要はないけれど、大事な人には知っておいてほしい」という線引きがあったようだ。

一方、大学に進学する際、民族名に変更するか悩んでいたという。そのきっかけは、高校生の時に参加した朝鮮奨学会の「ウリ文化祭」である。しかしながら、最終的に大学でも日本名を使用することを選択した。この顛末について以下のように語る。

> D 氏：ウリ文化祭っていうのがあって、そこで弁論を同い年の子がしてて。その弁論してた男の子が、奨学会で仲間ができて、自分の行ってる高校での名前を通名から本名に変えたら、からかわれるとか、韓国人のくせにとか言われたって言ってて。名前を変えてしんどかった思いも、泣きながら弁論で喋ってる姿見て、それ〔名前を変えること〕ってすごい勇気のいることやったろうし、それをみんなの前でこう言える。到底自分にはできないけど、何かこう、力をもらった気がして、自分もどこかでそんなことできたらいいなと思って。[…]で、大学行く時に 1 回悩んだんですけど、結局通名にしました。[…]名前に変えると、通名の名前を使えなくなっちゃうのがちょっと寂しいなって思って。自分がずっと生きてきた名前だから。だから、それをなくしてしまう悲しさ。寂しかったから、名前はこっちの通名で行くけども。大学ではもう、自己紹介でもうちゃんと初っ端から自分が在日だっていうのは言ってました。

こうした顛末には、名前をめぐる現代の在日韓国人青年のリアルな思いが表れている。従来、名前の使用については「民族名＝民族性を明かす」「日本名＝民族性を隠す」という図式での理解が一般的であった。しかし、彼女が日本名を名乗ったのは、こうした図式におさまるものではない。そこには、生まれてからいままで使用してきた日本名への愛着がある。一方、民族性を明かしたいという思いもあるため、「日本名を使用しつつ、在日韓国人であることを公言する」という方法をとった。これは、日本名

と民族性それぞれへの思いを両立する、D 氏の戦術であると言えるだろう。彼女の語りは、「日本名を使用することは民族性を隠すことである」という理解の単純さに再考を迫るものである。

大学卒業後は小学校教員となり、外国にルーツをもつ児童の支援に関わるようになる。最初に勤務した学校は「同和教育推進校」であり、人権教育・在日教育に積極的に取り組む現場だった。彼女は自身の出自を強みとして意識し、「外国にルーツのある子どもに寄り添える先生になりたい」と考えるようになった。現在は大阪市の外国人教育企画会にも所属し、人権教育担当として学校全体の多文化共生教育を推進している。

3　関係としての民族――他者と／をつなぐ実践へ

青年会との関わるようになったきっかけは大学時代の学生会である。大学在学中、友人の誘いで学生会の活動に参加し、関西地方の学生たちと交流するようになる。そしてそこで青年会にも参加するよう声をかけられたのである。当時青年会に参加していた時のことを楽しかった、と振り返り、「何より先輩がすごいよくしてくれたって思い出」があるという。

D 氏は、青年会に参加することで、「自分が在日だって思う気持ちが強くなった」と語る。その理由について、彼女は以下のように語る。

> 筆者：青年会って飲み会とかが多いと思うんだけど、そのなかで、どういったところで在日としてのアイデンティティとかって芽生えたり意識したりするんだろう。
>
> D 氏：逆なんちゃいます。飲み会やから、言ったらみんなもう酒だけ飲んで喋りまくってるわけじゃないですか。もうなかには、アホな先輩やなとかって思うわけじゃないですか。ただ、そんな飲んだくれてるおバカな愉快な方々が、ふとした瞬間になんか国籍の話したり、ふとした瞬間になんかルーツの話した時に、ちょっとこう、表情変わったりとか、なんかそこはすごく真剣やったりするのが、なんかいいな。なんかそこにぐって惹かれたような感じがあります。[…] 日常会話のなかでも在日の話題につながるようなことがあるっていうのが在日なんやなって思いました。普通に友達と同じ話してても、そんなワード絶対出てこうへんけど、ここやったらそういう話のつながり方がある。

この語りは、アイデンティティが関係的に立ち上がることを示している。すなわち、アイデンティティ形成の契機は、民族文化を身につけたり、民族の歴史を学んだりす

ることだけではない。飲み会でのふとした会話をきっかけに、互いが在日韓国人であることを再確認することもあるということだ。加えて、彼女は「青年会でいろんな人と出会えること」を、自身が在日韓国人でよかったと思う場面の 1 つとして挙げている。これは、他者と関係性を取り結ぶことで民族に対する肯定的な感情が強化されることを示唆している。

一方、在日でよかったと思える場面として、「他の人に還元できたこと」も挙げている。 以下は D 氏の職場でのできごとを述べているものである。

> D 氏：在日っていうことを自分のクラスに公表した時に、公表した時に、子どもたちのなかで、私も実は韓国ルーツって言ってきてくれた女の子がいて。で、その女の子とその保護者を、学校外の行事ですけど、そういったルーツのある子しか参加できない行事に連れていくことができたってことがあって。〔その子どもと保護者が〕この経験できてよかったって、ここ来れてよかったって言ってもらえたのが、すごい嬉しかった。
>
> なんなら、そのお母さんが卒業された学校の民俗学級が 40 周年迎えて。で、お母さんがその民族学級の名づけ親みたいな名前をつけたっていうので、その 40 周年記念の式典にお母さんをつないだんです。それで、文集とか、食事とか、お母さんも参加することができて。そういった他の人にも還元ができた時。[…]自分の力だけではないけども、自分が在日やったってことで、お母さんも安心してそういったことを打ち明けてくれたんじゃないかなと思って、すごい嬉しかった。

この語りをみると、「他の人に還元できたこと」とはつまり、彼女が民族を通じて他者に新たな経験やつながりを提供することである。すなわち、民族は彼女自身が他者とつながる基盤であるだけではなく、他者をまた別の他者や経験につなげる基盤にもなっている。

D 氏の語りは、在日韓国人としての生がもはや「属性」ではなく、「関係のあり方」であることを教えてくれる。民族を生きるために、名前に自身の民族性を託す必然性はない。日本名を用いながら、在日韓国人として他者と関係性を紡ぐこともできる。また、青年会や学校での経験にみられるように、民族は誰かと共に語り、笑いあうことを可能にしてくれる基盤になり得る。こうした彼女の経験は「つなぎ／つながる民族」のあり方を示してくれている。

2.5　E 氏の生活史：「隠すものも何もない」

> E 氏：民団ってなんなん。みたいな感じのとこから始まって、在日の集まりって聞いた時に、すごい安心感があって。なんかこう、隠すものも何もないし、最初から 1 歩踏み出して喋れるっていうこの環境がすごいいいなと思って。

E 氏は兄から青年会に参加するよう誘われた時のことを上記のように振り返る。ここで注目したいのは「隠す」という単語である。下記するように、彼は在日韓国人であることを隠していた時期があった。しかし、今では「在日だから、今の自分がある」とまで語る。このような変容はなぜ起きたのだろうか。彼の生活史をもとに考えていきたい。

1　「隠す」ことから始まった在日意識

E 氏は 1990 年代、中国地方で生まれた。両親はともに韓国籍で、彼も韓国籍だったが、帰化をしており現在では日本国籍である。母方の祖父母は戦時中、大阪へ出稼ぎに来たのち、中国地方の朝鮮部落に移り住んだ。大阪にいたころ、祖父が牛を扱う仕事をしていたこともあり、中国地方に移り住んでから牛舎を構えたという。母は 12 人兄弟の 2 番目で、祖母はいまも 89 歳で焼肉店を営んでいる。祖母は 16 歳で結婚し、以来、働きづめの人生を送った。「青春なんてなかった」と語る祖母の姿は、彼にとって「働くこと＝生きること」を象徴する存在である。

祖父母が住んでいた地域は、刑務所や火葬場が近くにあり、町の整備が後回しにされた地域である。彼はこの地を「京都のウトロのよう」と語る。周囲はトタン屋根の家々が連なり、かつての朝鮮部落の名残を色濃く残す。「おばあちゃんちの料理がいつも食卓にあった」というように、彼の家庭は祖父母から受け継がれた文化が色濃く残っていた。

E 氏が生まれ育ったのは、祖父母が生活していた朝鮮部落の近くであった。そのため、小学校にも在日韓国人が何人かいたという。もっとも、幼いころは毎日のようにキムチや豚足が食卓に並んでいても「それが当たり前で、在日だからとかは思っていなかった」という。

彼が自らの出自を明確に意識したのは小学校 3 年生の時であった。帰り道で上級生の女子から「韓国人なんやろ」と言われたのである。当時、彼は自身が在日韓国人であることを知らなかったため「違いますよ」と答えたという。しかし、気になって母に尋ねたところ、「そうよ」と告げられたという。 それまでの生活では、家でキムチや豚足を食べることも、母が近所にキムチを配ることも「普通のこと」だった。だがその日を境に、彼は自分が「日本人ではない」ことを意識しはじめる。

学校では特別な差別や暴力を受けたわけではなかったが、「違う」という事実が彼のなかに恥じらいを生んだ。E 氏は周囲に自身が在日韓国人であることを告げなかったというが、その理由を「弱みを握られたくなかった」からだと語る。この言葉に象徴されるように、彼は自身が在日韓国人であることを意識的に隠すようになった。彼は当時の心境を以下のように語る。

> E 氏：周りと違うのが恥ずかしいっていうのもあったし。今まで応援団長とかリーダー格だったんですけど、それ〔在日韓国人であること〕を理由にいじめられるんじゃないかな、っていう思いがあったんですよ。弱み握られるわみたいな。で、僕のなかでは隙を与えたくなかったんですよね。[…] 運動会に、お母さんが来たら、なんかこう、すごい派手な格好で来て叫ぶんですよ。日本の家庭とは違うような感じで。野球やってましたけど、スタンドでお母さんが見てた時に、1人だけ叫んで、めっちゃ応援してくれるんですよ。そういう違うとこがあって。今となったらこう、感謝しないといけないですけど、やっぱ恥ずかしいというか。在日っぽい感じが恥ずかしかった。

中学生のころ、D 氏の地元の港には北朝鮮の万景峰号が寄港し、ニュースでは拉致問題やミサイル実験が連日報じられていた。学校でも「朝鮮は悪い国」とするような雰囲気があり、彼は「朝鮮＝悪」という認識を自然に刷り込まれたという。「北も南もわからなかった。ただ朝鮮人というひとくくりで解釈してた」と回想する。この状況のなか、彼のなかでは「在日であること＝マイナスの属性」という感覚が定着した。そして、自らを守るために出自を隠していた。

2　野球部での経験――開示と受容の成功体験

このように、小中学校では自身の出自を隠していたが、高校時代、状況が変化する。高校での野球部活動を通して、「韓国人であること」が否定的なものではなくなっていったのである。彼は弱小チームのキャプテンに任命され、わずか 5 人の部員からスタートしたチームを率いて、3 年生の時には県大会ベスト 8 まで導いた。当時、監督も E 氏が在日韓国人であることを知っていたが、「そうなんですね」と言うのみで、「むしろハングリー精神というか、そういうのを買ってくれた」という。

野球部での経験は E 氏にとって 2 つの意味で大きな成功体験となった。1 つは「弱いチームを強くする」という経験それ自体である。もう 1 つは、在日韓国人であることを明かしてもなお、チームを率いていたということだ。すなわち、在日韓国人であることを周囲に開示した状態で人間関係を形成することにおける成功体験である。実際

に、彼は今となっては「在日韓国人だからいじめられるとか、僕のなかでは一切そういうことがなくなった」という。

社会人となった彼は、中部地方の自動車会社に就職する。組合活動のなかで「選挙権がないこと」が不利益として意識されるようになり、3 年前に日本国籍を取得した。

日本国籍を取得する際の顛末を聞くと、彼の家族は国籍に強いこだわりを持たないように見受けられる。母は「自分の好きなようにしたらいい」と背中を押しただけで、特別な意見を言うことはなかった。長兄は韓国籍を誇りとして保持し、次兄は日本人の妻との結婚を機に帰化した。家族内でも多様な選択が共存しており、D 氏の選択も多様な選択肢の 1 つとして家族に受け入れられていたのである。

3　「在日だから今の自分がある」――誇りとしての民族性

青年会に参加するようになったのは社会人になってからである。同じく、中部地方に住む兄の紹介で参加するようになった。彼は青年会に参加したばかりのころの印象を以下のように語る。

> E 氏：なんか停滞してるというか、元気ないというか。そもそも参加者あまりいなかったんですよね。兄貴が会長だったんですけど、その次の会長の時もほとんど会の活動ができてなかったし。大丈夫かな、っていうのが一番でした。なんかもっとこう、ここにいる人にとって刺激あるものにできないかな、って思ったのが一番ですね。

E 氏は「停滞」という言葉を用いているが、一般的に考えればこうした状況であれば、青年会から足が遠のきそうである。しかしそうはならなかった。彼は「高校のころと同じ感覚」だったという。すなわち、「高校の野球部と一緒で、それが在日に変わっただけで、低迷してるものを上げていきたい、っていう感覚が一番だった。根本は一緒ですね。弱いものを強くする。盛り上がってないものを盛り上げる」と語る。

現在、彼は地方本部会長として活動している。組織を運営するにあたって難しさを感じることもあるが、彼自身の自己成長にもつながっているという。

> E 氏：ほんと、今は課題に当たってるって感じですね。[…]今、在日の世界に入って、自分の成長に本当につながってて、こう、どうしたらいいんだろう、って思います。執行部にしろ、1 人 1 人悩みも性格も違うじゃないですか。そういう人たちになんて声をかけて寄り添ってあげればいいんだろう、って。

こうした語りをみると、現在の E 氏の青年会での活動は、高校時代の野球部での経験と、自身が在日であることの交点に位置づけることができるように思われる。すなわち、彼が現在青年会で会を盛り上げようという意思を持つようになったのは、野球部での成功体験があったからであり、また、なぜそれが青年会だったのかといえば、彼が在日韓国人だからである。

E 氏は現在、「在日でよかったなと思ってます」と語る。青年会での他者との出会いはもちろんのこと、「自分がいろいろ頑張ってこれたのも在日だからだと思う」と語る。すなわち、「おばあちゃんとかもこっちに来て苦労してるし、そういう背中を見てきたから自分も頑張れるんだと思う」「在日だから、韓国人だから頑張れたし、今の自分があるんやろうなってのは思いますね」という。

E 氏の生活史を振り返ると、彼にとって在日韓国人であることが「恥」から「誇り」へと変わる過程を読み取ることができる。野球部での経験や青年会での活動を再帰的に振り返った時、民族は隠すものではなく、彼の糧として位置づけられているのである。在日であることは、生き方の姿勢であることを E 氏の語りは教えてくれる。

2.6　F 氏の生活史：「話しやすいのも在日のコミュニティやからかな」

> F 氏：青年会行くこと自体が自分って在日やな、って感じで。「あ、ここってルーツある人しかおらへんねや」ってふと思う。[…]自分の学生会時代の友達とかと会ったりした時に、昔のイベントの話するのも楽しいし、あとは在日あるある話したり。話すとやっぱあるあるよなみたいな感じが。共感し合える。[…] 在日に関することの悩みとか、何か直面した問題っていうのも話しやすいのも在日のコミュニティやからかな。

青年会に参加するなかで「自身を在日韓国人だと思うのはどのような時か」と質問したところ、F 氏は上記のように回答した。F 氏にとって青年会は学生会の経験を共有した仲間との関係性が折り重なった空間であり、同時に、自身が在日韓国人であることを確認することができる場でもある。以下では、F 氏の生活史に即して、彼女がいかにして青年会に参加するようになり、また、そこでどのような経験をしてきたのかをみていこう。

1　父から受け継いだ民族のまなざし――家庭と地域をつなぐ教育実践

F 氏は 1990 年代に近畿地方で生まれた女性である。両親はともに在日韓国人で、彼女は在日韓国人 3 世である。国籍は韓国。彼女が生まれ育ったのは近畿地方でも有数の在日韓国人集住地域で、青年会の先輩からは「在日のサラブレッド」と言われることもあったという。

地域では在日韓国人の子どもたちのための活動がいくつも行われていた。学校の民族学級はその代表例である。これは放課後に韓国にルーツのある児童・生徒を集めて韓国の文化や韓国語を学ぶ活動であり、F 氏も参加していた。もっとも、現在では地域の在日韓国人の人口が減少し、中国人やベトナム人の児童が増加しつつあるという。そのため、在日韓国人のみを対象とした民族学級は成立しにくくなり、日本人や他の在日外国人も交えた「国際理解のための活動」に変化しているという。F 氏はこうした変化について、「時代的にそうよな、と思いつつも、やっぱりちょっと悲しい」と述べる。

また、他の小学校での民族学級に参加する児童たちを集めた合同サマーキャンプや運動会も行われていた。F 氏はこれらの活動について「中学生とか高校生のリーダーもいて楽しかった」と振り返るが、スタッフとして参加した彼女の父親のほうが強く影響を受けたようだ。父親はこれまで「民族意識はあったけど、民団の活動とかには参加してなかった」ようだ。しかし、「キャンプのスタッフをして、娘にも意識を持ってもらいたいとか、こういう活動したいとかあったんでしょうね。〔父親に〕火が

ついた感じ」だったという。そして、父親は民族学級の保護者会の会長に就任したり、市議会議員も巻き込むような活動を行うようになったという。

こうした父親の存在はF氏にも影響を与えた。1つは、民族名の使用である。彼女は日本名で小学校に通学していたが、小学 3 年生から民族名を使用する。その背景には父親が民族学級の保護者会の会長に就任したことがある。「会長の子どもが通名ってどうなんや、って保護者会でなったみたいで、それでパパから『ごめん、民族名で行ってくれへんか』」と言われたのがきっかけだったという。彼女はこの時、「正直ちょっと嫌だな、ってのはあったけど、パパが一生懸命やってるのは分かってたから、うんわかった、って感じ」だったという。そして、中学生になった時も父親が活動を続けていたため、民族名を使用していたという。

また、F 氏は小学校のころから、民団が開催している子どもたちのための韓国語教室にも父親の勧めで通っていた。この韓国語教室は、韓国語の指導にとどまらず、弁論大会が開催されたり、「韓国に関することならなんでも教えてくれるところ」だったという。これは学校外の活動であるため、他の小学校の児童とも知り合いになり、「その子らと合同サマーキャンプでまた会えるのも楽しかった」ようだ。そのうえで、「小学校の民族学級だけやったら多分民族意識って高まらなかったと思うけど、こういう教室にも父が行かせてくれたのが私にとっては大きかった」と振り返る。

このように、父親の影響を背景に、F 氏は小学校のころから民族や韓国に対する関心を抱いていた。そして中学校でも、民族学級の参加が任意であるにもかかわらず、「韓国について知りたいっていうのもあったから」参加していたという。F 氏は「小学校のころよりも中学の民族学級の方が鮮明に覚えている」という。彼女が話したエピソードのなかでも最も印象的なものを紹介しよう。

> F 氏：民族学級のソンセンニムとは別に、民族学級担当の日本人の先生がいて、[…]その先生がすごい熱心やったってのは覚えてて。その先生が民族学級の発表会を初めて見た時にすごい泣いてくれてて。感動した、って言ってて。ていうのが、その先生は自分が部落出身やったから、多少、なんか通じる部分があって、みんなが団結しているのを見て感動した、って言ってて。そういう出会いもあったりして、すごい、中学の方が鮮明に覚えてる。

部落出身の先生が涙を流した場面は、F 氏にとっても強く印象に残っている。民族学級が「在日だけの場」というよりも、思わぬ人との共鳴を生む場になりうることを物語っている。

2　距離をとり、再びつながる――高校・大学期の模索と回帰

ここまで、F 氏の小中学校の経験について記述してきた。これをみると、高校以降も一貫して民族団体と関わりを持ち続けるように思われるが、実際にはそうではなかった。彼女は国際系の学科がある高校に進学したが、そこは「在日だけじゃなくて、中国とかアメリカの人もいて、在日以外の外国人がいる」ことに気づかされるような環境であった。彼女はこうした環境を「それまでとは別世界で、ちょっと自分も環境を変えたくて、ちょっと民族的な意識はちょっと薄れつつ、高校では民族よりも学校生活をエンジョイ」していたという。

もっとも、民族団体との関わりが皆無だったわけではない。高校 2 年生の時に、韓国へのサマースクールの知らせが民団から来て、それに参加した。高校生活を楽しんでいるなか、あえて再び民族団体の行事に参加した際の心境を以下のように語っている。

> F 氏：高校生活もめっちゃ楽しいけど、在日のことを話すとか、考えるとかっていうのもなくなってたから。でも、父が〔地域で在日の子どもたちのために活動を〕やり続けてて、小学校のサマーキャンプを手伝いに行ったりとかしてっていうなかで、民団の便りが来て、ちょっと行きたいなって思って。[…]正直家族は父のそういうの〔活動への傾倒〕はあまりよく思ってなくて、ママとかも「え、家族より大事なことってあるの」みたいな感じで。あんま家とか帰ってこられへんような日々とかで、外に付き合いで行ったりしてても、私はむしろそれがなんか誇らしかったし、そういうところが好きだし、憧れてた。

この語りは、父親が地域の在日の子どもたちのために活動を行っていたため、彼女にとって民族団体をはじめとした在日コミュニティが意識のうえでは身近なものであり続けていたということを示唆している。すなわち、彼女の日常的なコミュニティは高校を基盤としたものであったが、民族団体をはじめとした在日コミュニティも、参加しうるコミュニティの選択肢として温存され続けていたのである。そしてそこには父親の存在が大きく影響していたということだ。

その後、F 氏は地元の大学に進学し、成人式をきっかけに学生会に参加するようになる。彼女曰く、「私たちの 2 つ上くらいの代はとにかくみんな熱い」人たちが集まっており、「学生会の黄金時代」だったという。彼女自身も「私も民族とかの熱い話は好きだからそういう話題に乗って。それがすごい居心地がよかった」という。

3　関係のなかで生きる民族――親密さと共感のネットワーク

もっとも、F 氏は大学を卒業してから 4 年ほど青年会に関わっていない期間があった。こうしたなかで彼女が青年会に再び参加した理由を「またつながりを肌で感じたいみ

たいな思いがあった」と語る。そしてその背景には当時交際していた恋人の親から、彼女が在日韓国人であるがゆえに交際を反対されるというできごとがあった。

> F 氏：社会人で付き合った人の親が韓国大反対みたいな、もう会うのも嫌っていうレベルで。[...]Yahoo ニュースとかで在日がどうこうって言われても、別になんか他人事やったんですよ。でも、実際に初めて拒否されることで、自分の先祖のこととか、学生会のこととかも否定されたような気持ちにもなって、めっちゃ悔しかった。[...]そういうことがあったので、久しぶりに〔青年会に〕誘ってもらった時に、やっぱりまたつながりを肌で感じたいみたいな思いがあったんですよ。で、久しぶりに声かけてもらった時に行ってみようと思って、4 年ぶりぐらいに〔参加した〕。

恋人の親との間で生じたできごとは、民族的な肯定感を損ねる可能性もある。すなわち、民族を根拠に差別をされるのであれば、民族との関わりを断ちたいという考えに至る可能性もある。この点について彼女は「やっぱりこう、マイナスなこともあるんやなって思ったけど、でも自分は最終的にはこれをプラスに変えていきたいってのがあった」と語る。そしてこうした考えを支えるのは学生会を始めとした在日コミュニティでの経験である。「学生会での成功体験があったからやと思います。学生会とかがなかったら、マイナス思考になってたと思うけど、自分は学生会で友達もできたし、人としても成長できた経験があるんやから、これで在日のことをマイナスに思うのはもったいないって思ってた」という。

上記したエピソードは、従来、在日コミュニティで指摘されてきた「差別に対抗する民族意識」といった言説を想起させる。つまり、差別を受けても自己否定をしないで済むためには、民族の誇りや民族への愛着を強く持つ必要がある、という言説である。しかし、彼女が愛着を抱いている集団は、「民族」といった抽象的な概念で汲み尽くせるものではない。地域で活動してきた父親や学生会で出会った人びととのつながりや、こうした出会いを経て自身が成長してきたというリアリティが、差別を受けてもなお在日コミュニティに所属し続けようとする意志を形作っている。つまり、彼女の「民族意識」の内実は、「民族」といった抽象的な集団に向けられた愛着ではなく、家族や民族団体といった集団における、個別具体的な他者との、親密でかけがえのない関係性への愛着なのではないだろうか。

もっとも、青年会における他者との関係性には、民族的な要素もある。たとえば、「自分が韓国人で拒否された話をしても、日本の友だちは『そんなことあんの』っていうけど、学生会時代の友達とかは、もしかしたら自分もそういう同じふうに今後なる可能性があるって自分の立場になって考えてくれる」という。こうした語りは、民族団体における関係性が、単なる親密な関係ではなく、「親密で、かつ、民族的な共

感を示すことができる関係性」であることを示している。いわば、親密であり、民族的である関係性だからこそ、この関係性は「民族意識」の基盤になりうるのである。

ここまで F 氏の生活史を記述してきた。彼女の事例が伝えるのは、「民族意識」という概念は具体的なできごとに支えられている、ということである。民族意識はある日突然舞い降りるものでも、生来のものでもない。地域や学校での家族・友人との経験を経て形成されるものなのである。

2.7　G氏の生活史：「K-POPのブームがあっても、なんか、なんだかな、って感じてた」

1　「在日として育った」家庭環境

G 氏は 2000 年代に東北地方で生まれた女性である。国籍は韓国である。先祖は戦前期に大阪を経由して日本に渡った在日韓国人であり、彼女は在日 4 世にあたる。曾祖父母は仕事を求めて日本へ渡り、当初は大阪に住んでいたが、東北地方へと移り住んだという。親戚は東北地方のみならず近畿や関東にも多く、親族ネットワークが全国に広がる家庭で育った。

母親は専業主婦で、父親は家業を手伝いながら複数の店舗運営に関わっていたため、家族は東北地方や関東を中心に何度も転居を重ねた。G 氏は幼少期から、家庭内では「オンマ」「アッパ」と呼ぶなど韓国語での呼称が当たり前であり、冠婚葬祭ではウリマルによる儀礼が行われていた。そのため、彼女にとって「在日として育つ」ということはごく自然な環境であった。

G 氏の家族や親族の多くは朝鮮学校に通学していた経験をもつため、「葬式も全部韓国語で行うのが普通だった」と語っている。これは、彼女が家庭内で在日韓国人としての民族文化を日常的に経験してきたことを示唆している。一方で、自身は日本の小学校に通い、土曜日のみハングル講習会に通うという生活を送っていた。日本の学校生活では、幼稚園のころから「お母さん・お父さん」と言わず「オンマ・アッパ」と呼ぶ自分が他の子どもたちと違うと感じていたという。

G 氏の親戚について 1 つ、特に挙げておきたいことがある。それは、彼女の祖母の兄が 1950 年代後半から行われた北送事業によって北朝鮮に渡ったということである。祖母が「北にいるお兄ちゃんの話をする時、すごい辛そうにしてるのが分かってた」という。そのため、彼女は幼いころ、なぜ祖母が日本にやってきて、生活してきたのか、といったことを「なんか聞いちゃいけないと思ってた」という。彼女が祖母に渡航の経緯などを聞くようになったのは祖父が亡くなってからである。祖母が高齢になり、家族の記憶を伝えようと語り始めたことで、G 氏も初めて自身のルーツを具体的に聞くようになった。そして G 氏が 19 歳のころ、祖母や両親から家族の歴史を詳しく教わった。この時にのことについて彼女は、「やっと聞いていいんだと思えた」と語っている。

2　学校経験と K-POP ブームへの距離感

G 氏は小学校入学時点では民族名で通学していたが、小学校 3 年生の時、家庭の意向で日本名を用いることになった。彼女は「日本の社会で生きていくなら、そうした〔日本名を使用する〕方がいいって思ったみたい」と、当時の家族の意向について説

明する。この時期、文房具などすべての名前を変えたことで、周囲の同級生から「離婚したの？」などと尋ねられるようになった。彼女はこの経験を通して「名前が 2 つあることが嫌だった」という。「通称名ってなんだろう、みたいな。どっちも自分の本名であることには変わりないのに」と思っていたと当時を振り返る。

さらに、小学校 6 年生の時、同級生から「韓国に帰れ」「キムチ野郎」と言われた経験を持つ。帰宅後に両親へ泣きながら打ち明けたところ、母親に「それを言われてどう思ったの」と尋ねられ、「納豆野郎って思った」「納得できないけど、オンマとアッパを誇りに思っている」と答えたという。このできごとをきっかけに、「もし朝鮮学校に通っていたら、こんなことは言われなかったかもしれない」と感じたと述懐している。

G 氏がこうした差別的な発言を受けた時代は、ちょうど全国的にヘイトスピーチが可視化され始めた時期であり、新大久保などで排外的デモが行われていた。彼女の被差別体験はこうした社会的空気のなかで醸成された「韓国」に対する偏見と不可分ではないだろう。一方で、中学に進学するころには K-POP ブームが拡大し、韓国文化への人気が急上昇した。彼女は「小学校の時は『帰れ』と言われたのに、中学では BTS や TWICE の話題で、私が韓国人っていうとすごい羨ましがられた」と語る。

K-POP ブームの到来は、多くの場合在日韓国人が自身の民族性を肯定的に捉える契機として語られる。しかしながら、彼女はこれを「手のひら返し」と感じたと言い、どちらかといえば冷めた目で見ていた。以下の語りにはなぜ彼女がこうした態度で K-POP ブームをまなざしていたのかがよく表れている。

> G 氏：いいなって、逆に羨ましがられる存在になった。でも私は韓国人じゃないから。在日だから。だからあんま嬉しくなかった。[…] なんか喋ってって言われるのもうっとうしいし、「いただきますって韓国語でなんて言うんだ」とか言われても「食べろよ勝手に。そんなところで韓国語いらんから」って思ってたし。[…]自分で韓国人だよっていうのが嫌だった。在日同士なら、私は在日だよって言ったらわかるけど、今の、日本の子に在日ですって言っても、わかんないから。その辺がやっぱり、K-POP のブームがあっても、なんか、なんだかな、って感じてた部分。

G 氏がここで語るのは、K-POP ブームによって表象される「韓国人」と、日本での歴史をもつ「在日韓国人」の差異である。そして、K-POP ブームはあくまでも「韓国人」によるものであり、K-POP ブームによって日本人が獲得する肯定的なイメージはあくまでも「韓国人」に対するものである、というのが彼女の理解である。

それでは、彼女が考える「在日韓国人」とはどのような存在なのだろうか。彼女が考える「在日韓国人」の原基的なイメージは、幼少のころから交流がある朝鮮学校に

通う人びとである。彼女自身は朝鮮学校に通学していないが、冒頭でも説明したように、家族や親族の多くは朝鮮学校に通っていた。こうした環境のなかで、彼女は家族や親族が朝鮮学校に通っていたころの友人の子どもたちと交流する機会があったのである。彼女はこうした朝鮮学校に通う人びとについて、以下のように語る。

> G 氏：日常生活では全部の韓国名で、それこそ通称名がない子も結構いてさ。あと、みんななんか北の言葉喋ってるし、単語も全部韓国語で話す人いるし、みたいな。あと、チェサもするし、家庭もパチンコで働いていたり、みたいな。とにかく在日文化だよね、ってことを全部してる人たち。

いわば、彼女にとって「在日韓国人」とは、名前や言語を始めとした面や、家業・先祖祭祀といった家庭生活において、在日韓国人としての民族文化を実践している人びとを指している。彼女がこうしたイメージ抱いていたため、K-POP ブームで表象される「韓国人」を、「在日韓国人」とは異なる存在として受け止めていたのである。

3　青年会での経験とギャップ

先に彼女が抱いていた「在日韓国人」イメージがどのようなものであるか説明したが、こうしたイメージは彼女が青年会に参加してからの経験にも少なからぬ影響を与えている。ここでは、彼女が青年会に参加する経緯から、参加してからの印象といった点について記述していく。

彼女が青年会に参加するようになったのは、18 歳の時であり、当時彼女は高校 3 年生であった。韓国の大学への進学を考えており、「何かつてがないかな、って思って民団に行くようになった」という。当初、G 氏は青年会の他の参加者について「あまり民族意識がないな、って思った」という。以下はそのように感じた場面を語ったものである。

> G 氏：最初参加した時、アニョハセヨって挨拶したら、「え、あ、アニョハセヨ」みたいな感じで〔返答された〕。で、喋りながらちょっと韓国語とか話すじゃん。そしたら「なんで韓国語話すの、誰も話さないよ」って言われて。[…]なんか違うな、って思った。なんか、在日意識がない、あんまり薄い子たちだなって。自分とは違うな、って感じ。[…]やっぱそういう子をみてると、日本文化のなかで生きてきたんだな、日本人と変わらないな、っていうのが感想で、結構ギャップがあった。

G 氏は初めて参加した際は、青年会について「私の居場所じゃないかも」と感じて

いたという。しかし、2度目に参加した他地方の青年会との合同イベントが「とにかくめっちゃ楽しかった」という。そして「そこから、一緒にいるなかで、このままずっと参加してもいいのかな、って思うようになった」という。

このように、G 氏は参加を重ねるにつれて、青年会を自分の居場所であると感じるようになったが、一方で他の参加者とのギャップが完全に解消されたわけではない。たとえば、「私は K-POP とか韓国行きたいって熱もない」「みんななんか韓国行きたいって感じだけど、私は全然なくて。行ければラッキーかな、くらい」だという。こうした韓国や韓国文化への温度差をみて、G 氏は「青年会の人たちは韓国人になりたい人なのかな、っていう印象なんだけど。私はそうじゃないから。そこはちょっと違うかな」という。

これらの語りをみると、G 氏にとって青年会は、「在日韓国人」の集まりとはやや異なるものとして位置づけられているのではないか、と考えられる。なぜならば、先にも述べたように、彼女にとって「在日韓国人」のイメージは、朝鮮学校通学者に代表されるものであり、青年会に参加している人びとの多くはこうしたイメージに合致しないからである。

しかしこのことは、彼女が青年会に対して否定的な評価をしている、ということを意味しているわけではない。むしろその逆である。彼女は青年会を通じて「全国に友だちができたし、それは私にとってすごい大切な人たち」という。

こうしたことを踏まえると、彼女にとって青年会は、「民族文化に触れる場所」ではなく、人間関係が集積した空間であるといえるだろう。彼女にとって青年会は、彼女が考える「在日韓国人」と合致する空間ではないかもしれない。しかしながら、自身と他者の間にあるギャップを感じながらも彼女が青年会に参加し続ける背景には、そこで獲得することができる友人関係への魅力がある。G 氏の語りは、在日韓国人の多様化によってギャップが浮き彫りにならざるを得ない状況のなか、いかにして在日韓国人の共同性が形成しうるのかを考えるにあたって重要な事例として位置づけることができるだろう。

2.8　H 氏の生活史：「半日本人半韓国人、むしろすごくいい」

韓国人の両親を持ち韓国で生まれたいわゆる「ニューカマー」である H 氏は、現在の自身の立ち位置を「半韓国人半日本人」と表していた。一見、その自己認識は「韓国人でも日本人でもない」中途半端な立場を悲観的に見つめているように思えるが、実際、彼は「すごくいい」と肯定的に評していた。彼が「半韓国人半日本人」という自己の立場を肯定的に受け取っている背景にはどのようなものがあるのだろうか。

なお、H 氏とのインタビューは韓国語で行われたため、本稿で引用した H 氏の語りは筆者が適宜日本語に翻訳したものであることを事前に断っておく。

1　日本定住を決心

H 氏は 2000 年代、韓国で生まれた。韓国で幼少期を過ごし、11 歳になる年に父の仕事の都合で家族揃って日本に移住した。移住先は、近くにコリアンタウンや韓国学校があり、ニューカマーや在日韓国人が多く住む地域であった。「家から近かったし、韓国人の自分が韓国学校に行くのは普通だと思った」という理由で、韓国学校の小学 5 年部に編入した。その韓国学校には在日韓国人のほかに新規定住の韓国人や一時滞在者の子どもたち、韓国政府からの派遣教員が多く在籍しており、日本語よりも韓国語が多く飛び交う環境であった。母語が韓国語である H 氏はそのような韓国学校の環境にすぐに馴染めた一方、日本語を身につける必要性は希薄であったため、高校 2 年の時までは日本語をあまり話せなかったという。

やがて彼は弁護士を夢見るようになった。日本最高裁判所による尊属殺重罰規定の違憲判決の判例を知り、自身の知識をもって国家司法を変え一個人を救うことができる弁護士という職業に惹かれた。彼はもともと韓国に帰国するつもりだったが、先の判例をきっかけに日本の大学で司法を学びたいと考え、高校 3 年に入って日本語を熱心に勉強した。

見事日本の大学に合格した彼は、大学入学前に久々に韓国を訪れた際、日常的に馴染んでいた日本の風景や国民性とは対照をなす韓国が「外国のように感じられた」という。母国であるはずの韓国に違和感を持ち「もう自分には日本のほうが合う」と感じた彼は、今後も日本で生きていく決心をするようになった。

2　「純韓国人」とは異なる「半韓国人半日本人」としての自己認識

H 氏が進学した大学には韓国人留学生が多く在籍しており、彼は自然と留学生たちと交流を深めるようになった。留学生たちと交遊するうちに H 氏は「単語選択」の面で彼らと自分との間に「違い」を感じたという。韓国から日本に来たばかりの留学生

たちは韓国の流行語を知っていて話し方も「いまどき」であった反面、H 氏自身は「少し固い」「昔の人みたいな」話し方をしていたようだ。

しかし、H 氏は留学生たちとズレている自身の立場を「幸運だ」と語った。それは、自身の話し方や考えが留学生コミュニティの間には見られないものであり、「面白いキャラクター」として注目を浴びるからだという。

このように、H 氏は日本の大学のなかで韓国人留学生との交遊を深めることで韓国人としての自らの立ち位置を表す一方で、「純韓国人」とは言い切れない自身をも認識するようになった。H 氏は韓国人留学生たちのことを「純韓国人」と言い表すが、彼の考える「純韓国人」とは、韓国に純粋な血統を持ち、韓国社会の文化に親しい者であるという。彼いわく、文化への親和度はある程度居住歴で左右される。H 氏は、小学 5 年次から現在まで 10 年間日本に居住し日本の社会文化に親しい反面、韓国の最新の社会文化に疎い自身を「文化的に日本に近い」立場として理解していた。周りの日本人からも「お前は半分日本人だ」と言われるも、その言葉を受け入れている。

そして、H 氏は現在のアイデンティティを「半韓国人半日本人」と表し、このような立ち位置を「すごくいい」と評する。

> H 氏：他の人にはなかなかないアイデンティティだし、どこにも敵を作らないポジションだと思います。敵というか、円満な（둥글둥글한）ポジション。韓国人にとって〔自分は〕日本人すぎないけれど若干違って面白いし、半分は韓国人だから一緒に遊べる。日本人にとって〔自分は〕外国人というより、日本で育ったし日本についても詳しいし「(彼が日本語で語る）交ざり合わせる」感じなので、自分はすごく面白いと思います。

さらに、将来弁護士を目指している H 氏にとって、「半韓国人半日本人」といった中間的な立場は、柔軟な思考をもった弁護士になるうえで実用的な意味をもたらしていた。

> H 氏：1 つの国だけにアイデンティティをずっと持っていたら、中間に入って調整するのが難しいじゃないですか。[…]自分は中立的だから、望む職業〔弁護士〕的に見たらとても祝福されたポジションだと思います。

現在、H 氏は個人での一般永住権の取得申請中であり、取得後、「参政権以外は日本人と同じになれ」た場合の日本でのキャリアビジョンを着々と描いていた。

3　H 氏にとっての青年会の意義

H 氏が青年会の存在を知ったのは、インスタグラムで青年会主催の勉強会に関する投稿を目にしたことがきっかけである。青年会という存在とアイデンティティをテーマとする勉強会に関心を持ち、実際に勉強会で青年会メンバーの話を聞いたところ、とても面白く感じたという。また、民団が韓国政府と連携していることにも魅力を感じたようだった。

H 氏は青年会に参加し続ける理由として以下のように語った。

> H 氏：結局は〔自分が〕韓国人だし、日本で活躍する在日韓国人と交流できるし、韓国には成人式の文化がないけどここでは大使館がわざわざ用意してくれるし。

さらに、民族的なルーツは共通しつつも多種多様な人々と広く交流できる青年会の環境は、自分のアイデンティティや理想の弁護士像を考えたり、人脈を広げる上でプラスになると語った。彼は民団の青年会という共同体への参加を通して受ける支援や恩恵に感謝しつつ、いずれは自身が成長して循環的に共同体に貢献したいという責任感も明らかにした。

4　中間的なアイデンティティ

H 氏の語りは、固定的なナショナル・アイデンティティの枠組みでは捉えきれない、境界的で柔軟なアイデンティティのあり方を示している。「半韓国人半日本人」という自己表象は、一見、「韓国人でも日本人でもない」中途半端な立ち位置を嘆くもののように思えるが、H 氏の場合は、その中間的なポジションを肯定的かつ実用的なものとして捉えている。「純韓国人」や「日本人」とのズレをむしろ自分だけのキャラクターとして楽しんでおり、その中間的なアイデンティティを、異なる文化圏を媒介する独自の能力としてみなしていた。

そのような H 氏にとって青年会は、日本に住みながらも韓国人としての属性や韓国への帰属意識を再確認する場であるとともに、将来的なつながりを築ける共同体としても機能している。文化的な儀礼や多様な人々との交流をもって自身のアイデンティティが承認される経験を通じて、「支えられた分、いずれは貢献したい」という責任感を感じている。彼にとって青年会は、単に韓国人としてのアイデンティティを再認識する場を超え、韓国人と日本人との「半分ずつの自分」を堂々と生きていくための社会的な足場になっていると言えるだろう。

2.9　I 氏の生活史 :「国籍と民族は一致しない」

1　「在日としてのアイデンティティが強い」家庭環境

在日 4 世女性の I 氏は、1990 年代、日本人の父と在日 3 世の母のもとで近畿地方の在日コリアン集住地に生まれた。母方は 1 世代の曽祖母からその地域に定住している。そこで曽祖母は布団屋を、祖母は飲食店を営んでいた。I 氏は、母方の親戚を「在日としてのアイデンティティが強い」家系であると語った。毎年祭祀を執り行い、家庭内ではコリアンタウンで購入した「在日が作った食べ物」を食べ、従兄弟を「オンニ」「オッパ」と呼んだりと、民族的な文化が日常生活に自然と根づいていた。ただし、I 氏は日本名のみを用いており、また日常的に他の在日韓国人と接する機会は多くなかったという。

I 氏は小学校進学時に民族学校に通う選択肢もあったが、両親の政治的信条などを理由に日本の公立小学校に進学した。当初、「在日」という呼称や自身のルーツについて明確な理解をもっていなかった彼女は、自分は周りの日本人と何ら変わらないと感じていたという。それは、家庭内で継承されていた民族文化があまりに日常的なものとして染みついており、それが周囲の日本人と異なるものとして意識されることがなかったためである。

2　教育経験を通じた民族的な自己認識の再構築

I 氏が小学 4 年のころに両親が離婚し、彼女は母親と暮らすようになった。中学進学に際し他県に引っ越した I 氏は、母親の勧めで韓国学校に入学することになった。I 氏は、母親が自分を韓国学校に進学させた理由について、「日本人〔父親〕がいなくなったから、より『韓国』に近くなったのはもしかしたらあるかもしれない」と語り、「在日コリアンとしての誇りがすごく強かった」母親の民族的な志向性が、I 氏のライフコースをより民族的な方向へと導いた可能性を示唆している。

韓国学校には中学から高校までの 6 年間通った。進学を機に初めて民族名を名乗るようになった。現在では馴染んだ名前となっているが、当時は日本名を「無理やり」ハングル読みした名前に対して違和感を抱いていたという。中学 1 年の時、街中で「在日特権を許さない市民の会」によるヘイトスピーチを耳にし、そこで初めて「在日」という言葉を知った。だが、当時は母親が韓国人のクォーターで自分は日本国籍をもつ日韓のハーフであると理解していた。

韓国学校には在日韓国人に加え、新規定住者や一時滞在者の生徒・教師が多く在籍しており、言語・文化・知識・慣習・価値観の全てにおいて「韓国」色が強い環境であった。I 氏は在籍期間を通じて、新規定住者や一時滞在者の行動や価値観には理解し

がたい部分が多かったと語った。I 氏は彼らを「韓国から来た韓国人」または「本国から来た人」と称し、彼らに対して抱いた違和感を通じて「自分は日本人だな」と感じるようになった。やがて「日本生活が長いほど品行がいい」という感覚をもつようになり、彼らと日本で生まれ育った者との間に一線を画していた。

それでもI氏は、韓国学校在籍中は一貫して自らを「韓国人」と認識し、またそのように表明していた。高校 2 年の時、偶然に母親が「純粋な在日韓国人」であると知り、自分も在日韓国人であると初めて理解したが、その後も韓国学校のなかで自分が「在日かどうかっていうのは気にしたことがな」く、あくまで自己を「韓国人」という枠組みのなかで捉えていた。

韓国学校卒業後は日本の大学に進学した。韓国学校での教育経験に加え、母親から民族性を表明することの重要性を教わっていたため、大学では積極的に在日韓国人であることを明かすようになった。

「韓国人」に囲まれていた韓国学校から「日本人」が多数を占める大学へ進学した。教育環境が変化するに伴い、彼女の自己認識にも変化が生じた。大学では「韓国学校の当たり前」、すなわち現代韓国の文化が全く感じられなかったことが「カルチャーショック」であったという。韓国学校では「韓国から来た韓国人」と比べて日本人のように感じていた自分だったが、大学で周囲の「日本人」との違いを感じ、「あれ、自分あまり日本人じゃないかもしれない」と認識するようになった。その違いについては「まあ、〔日本と在日韓国人の〕ハーフだから仕方ないか」と「楽観的に」受け止めていた。やがてI氏は学内の韓国人留学生コミュニティに積極的に参加し、その場での居心地のよさを実感するようになった。

大学 2 年時にアメリカに半年間留学し、4 年時には韓国に 1 年間交換留学に行った。アメリカでは韓国語を話せるという理由で他の日本人留学生を差し置いてI氏だけが在米韓国人のコミュニティに誘われたり、韓国では日本語を学びたい韓国人学生に韓国語で日本語を教えていたという。このように、彼女は留学先で、自己の韓国人としての民族性を前面に出し、他の留学生と差別化されたネットワークを形成していた。とりわけ、「やっぱり韓国人といると安心するような気持ち」を再認識したという。

他方、留学先の多民族・多国籍な環境は、I 氏の国籍や民族に対する考え方に大きな影響を与えた。国籍と民族・アイデンティティが一致しない人との出会いを通じて、国籍や民族に対する考えが相対化され、「国籍と民族は一致しないし、必ずしも民族性って 1 つじゃなくてもいい」という考えを持つようになった。それはI氏の自己理解に影響し続けており、現在は日本社会の単一民族的な志向に対して違和感を抱くことがあるという。

3　民団との出会いと現在

I 氏の通っていた韓国学校は民団との関係性が深く、民団の行事に参加することが 1 年に何度かある。I 氏はその過程で学生会や青年会の存在を知り、母国訪問やオリニジャンボリーなどのプログラムに参加した経験がある。その流れで大学 1 年から学生会に加入し、そこが「心の拠り所」のように感じられたという。

一方で、「在日」性が強調されて「日本感が強い」と感じられた学生会の雰囲気は、「韓国」色の濃い韓国学校の環境と対比的に映った。I 氏自身は、韓国の「合理的な感じ」が性に合うと感じ、むしろそちらの環境の方が居心地がよかったと述べる。その後、アルバイトや社会人生活の多忙さから、徐々に民団の活動からは距離を置くようになった。

I 氏が再び青年会の活動に関わるようになったのは、韓国学校の同窓生からの誘いがきっかけであった。2022 年、当時青年会幹部の友人から光復節記念行事のボランティアに参加しないかと誘われた。ちょうど転職を検討していた時期であったこともあり、その友人に相談したところ、民団中央本部への就職を勧められた。I 氏によると、「民族に寄与したいっていう理由では正直な」く、「韓国学校みたいな韓国人コミュニティが恋しくなった」ことや、韓国語をビジネスの場でも使えるようにスキルアップしたいという理由で、中央本部への転職を決意したという。

I 氏は 2025 年現在、中央本部に勤務しながら、青年会が主催する在日韓国人に関する勉強会などにも継続して参加している。

4　「韓国」へのアイデンティフィケーション

I 氏は、在日韓国人集住地、日本の公立小学校、韓国学校、日本の大学、アメリカ留学、韓国留学、民団といった多様な教育・社会環境を移動しながら、様々な経験や出会いを通じて自らのアイデンティティをその都度問い直し、それらを重層的に蓄積しつつも状況に応じて再構築している。特に注目すべきは、I 氏が民族文化の根強い家庭環境のなかで、祭祀や呼称、食文化といった民族的慣習に自然と親しみながら成長し、その後、韓国学校で現代韓国の社会文化や価値観に直接触れ、これらの「民族的」な経験が彼女の志向性や帰属意識の形成に深く影響を与えている点である。そのなかでもI氏は、一貫して「在日」というカテゴリーよりも「韓国」に対する関心や親近感を軸に自己のライフストーリーを語っていた。これは、I 氏にとっての「民族」には「在日」と「韓国」が区分されており、「在日」よりも「韓国」という枠組みの方が自己をアイデンティフィケーションする際により重要な基準として位置づけられていることを示唆している。

2.10　J 氏の生活史：「韓国人やとも、もし日本人とも、もうほんまに 50/50」

> J 氏：自分に何回も問いかけたことがあってさ、I cannot find the answer やねんけど。Well、韓国人やとも、もし日本人とも、もうほんまに 50／50。[…]血は韓国やけど、生まれちゃった地は日本。

この語りは、一見すると曖昧な自己規定にも映る。しかし、彼女がこのように語らざるをえなくなるまでの道のりには、家族、学校、地域社会、民族団体、そして国際的な職場環境で培われた自己理解といった複数の層が折り重なっている。本稿では、J 氏の語りをもとに、彼女の生活史を「2 つのルーツを同時に生きる」主体として記述する。

1　生育環境――2 つの生活世界

J 氏は大阪の在日韓国人が多い地域で生まれ育った 20 代前半の女性である。祖父母は戦後の混乱期に日本にやって来て生活基盤を築き、両親はそのなかで在日として働き、家庭を営んできた。彼女は冠婚葬祭や料理など韓国文化が多く残る家庭で育ってきた。そのため、彼女は幼少期から自然と韓国にルーツを持つことを理解していたという。

一方で、学校や友人関係といった外の世界は日本の社会的規範のなかで構成されてきた。特に、J 氏が高校卒業まで日本の学校制度のもと教育を受けてきたことは、彼女の生活世界のもう 1 つの基盤であった。

しかし、高校時代に日本人の友人に在日韓国人であることを伝えたところ、「え、嫌じゃないん、それ？」と言われるなど、ルーツを公にすることには日本社会では一定のリスクが伴うという認識も、間接的に身についていた。また、公務員として働く姉が職場の同僚や結婚相手にルーツの開示をすることに対し葛藤する姿を見聞きするなか、周囲にわざわざ在日韓国人であることを伝えないという慎重さにつながっている。

それでも、自身が在日コリアンであることを否定的に捉えていない。また、日本人に限りなく近い存在であることも受け止めている。特に、3 歳の時に家族の意向で帰化をした J 氏は、日本の赤いパスポートを持つことで日本人であると感じると言う。また、日本で育ってきたから日本人に見られることも当然であると感じる。

2　国際的環境におけるルーツの語り直し

米国の大学に進学した後、J 氏は外資系の航空会社のクルーとして働き始める。多国

籍な職場環境は、彼女のアイデンティティ理解をさらに変化させた。海外では初対面でも自然に「Where are you from？」と聞かれる文化があり、その文脈において彼女は必ず韓国にルーツがあることを答えるようにしている。そうすることで会話が広がることがあるという。

> J氏：ビジネスクラスに韓国人の女性がいたわけ。 で、まあ、機内やし狭いから、まあ Say hi した時に、「Oh, by the way, I'm Korean って言って、"Oh my goodness !"」みたいな、絶対そういう小さい会話でさ、コミュニケーションがビルドアップされてさ

J氏は在日韓国人であることを気軽に開示できる国際的な環境を好んでいる。そうしたなか、こうした異なるルーツに寛容な環境は日本のドメスティックな企業ではまだまだ浸透していなのではないかとも感じている。

国際的に活躍するJ氏は、日本の外に羽ばたくことができた背景に在日韓国人のルーツがあったと認識している。特に、米国の大学に進学し、外資系の企業に就職できたという恵まれた環境を日本語も話せないなかで日本に渡って会社を設立し生活基盤を築いた祖父母や両親の努力のおかげであると語る。そのため、在日韓国人としてのルーツを持つことは誇りであって、彼女そのものであるという。

3　民団経験と「誇り」としてのルーツ形成

そんな彼女が自らのルーツを肯定的に感じるようになった背景には、小学生のころから参加した民団が主催する母国訪問プログラムの存在も大きい。彼女の母親は民団でイベントがあると何でも積極的に参加させたという。

> J氏：なんか小学校のプログラムがあったら民団で、韓国に行く、母国訪問みたいな。 で、それであ、自分ってそういうルーツがあるんや、みたいな。 多分在日のルーツを誇りに思うかは、きっと家族からはあんまり何も感じへんかったと思う。 そういう民団の組織を通してじゃないと、なんか、あー、私ってこういうルーツあったんやって、改めて実感することはなかったと思う。

J氏にとって民団の母国訪問プログラムは自身のルーツを「誇り」に思っていく基礎を作る上で大切であった。また、大学生の時に再び参加した母国訪問プログラムでは韓国のルーツを持つことで普段では出会わないであろう人々とも出会い、そうした繋がりを大切に感じている。そのため、将来子どもなどができた場合にはこれらのプログラムに「絶対に行きなさい」と言うと思うと語る。

J 氏の語りからは民団の活動が単に文化体験としての意味だけでなく、彼女にとって自身のルーツを確認する場であり、自尊感情を支える資源として機能していたことがうかがえる。一方で、ルーツを肯定的に捉えることに葛藤を抱える姉は、これら活動に参加したことがないという。これは、同じ在日韓国人であっても、社会的経験の違いによって民族的自己理解がいかに多様化するかを示す一例である。

4　「50／50」という自己理解――複層的アイデンティティの受容

ここで冒頭の語りを再び参照したい。

J 氏：韓国人やとも、もし日本人とも、もうほんまに 50/50。

J 氏の歩みを振り返ると、そこには日本人に近い存在であるという現実的な側面と在日コリアンとしてルーツを誇りに思うという精神的な側面を柔軟に受け入れてきたことがうかがえる。1 つは日本のパスポートや日本の学校に通うといった生い立ち。もう 1 つは国際的な職場環境や民団のプログラムといった彼女が在日韓国人であること故に経験できたと感じる経験である。この 2 つの経験は彼女のなかで二律背反ではなくそれぞれ個別のものと捉えられていると言えるのではないだろうか。そのため、彼女はアイデンティティを単一化させず、複層的なまま保つことを可能にしてきた。

結果として、彼女は「韓国人でも日本人でもない」のではなく、「韓国人であり日本人でもある」状態を自身の自然なあり方として語るようになったのである。そこには迷いや葛藤よりも、むしろ成熟した落ち着きが感じられる。

J 氏の生活史は、民族的アイデンティティが固定的ではなく、関係性や環境のなかで複層的に形づくられるという事実をよく示している。そして彼女の語りは、多文化的背景を持つ個人が現代社会のなかでいかに生き、いかに自分を理解していくか、その 1 つのあり方を描き出しているといえるだろう。

2.11　K 氏の生活史：「完全日本人寄り」

> K 氏：そう。もうね、私今完全日本人寄りなのかもしんない。[…]ただただ違和感感じる時は青年会にいて[…]留学生から日本人扱いされた時なんだよ。自分が日本人ではないんだけど、ここにいるからって思っちゃう。

インタビュー中盤、K 氏は現在の自身の立ち位置について上記のように語った。かつては青年会の会長を務め、在日コリアンとしてのアイデンティティを強く持っていた時期もあった彼女だが、現在は「完全日本人寄り」と自認するに至っている。彼女のアイデンティティはなぜ変容し、現在どのような論理で自身を規定しているのだろうか。

1　ダブルのルーツと名前をめぐる葛藤

K 氏は東北地方で、日本人の父と在日コリアンの母（祖父が 1 世、祖母が 2 世）の間に生まれた。幼少期に現在の居住地に転居し、物心がつくころには民団の行事に参加していたという。家庭内の文化は「おばあちゃん方の家に行くと韓国料理が出る」といった程度で、基本的には日本的な生活様式のなかで育った。K 氏は自身を「在日」というよりは「ハーフ」として認識しており、それを「かっこいい」と捉え、周囲の友人にもオープンに話していたという。

しかし、民団やオリニといったコミュニティに参加するなかで、K 氏は自身の名前にまつわる葛藤を抱くようになる。周囲の子供たちが民族名で呼ばれるなか、K 氏は日本名の愛称で呼ばれていたからである。K 氏は当時の心境を「みんな韓国の名前あんのに、なんで私は日本の名前で呼ばれたか。逆に仲間外れみたいな」感覚があったと振り返る。彼女にとって民族名は、コミュニティの一員として認められるための象徴的な記号であり、日本名で呼ばれ続けることは、その輪に入りきれていないという疎外感をもたらすものであった。

興味深いことに、この感覚は青年会活動に参加し始めた 20 代前半まで続くが、関係性が深まるにつれて変化が生じる。周囲が親しみを込めて「〇〇ちゃん（日本名の愛称）」と呼んでいることを理解し、組織の一員として認められているという実感が伴うにつれ、日本名の愛称を受け入れられるようになったのである。

2　青年会会長への就任と「在日」アイデンティティの確立

高校から大学にかけて、K 氏は韓国語の学習に力を入れるようになる。その動機は「勉強ができなかったから特技が欲しかった」という実利的なものに加え、「在日なの

に韓国語ができないことへの恥ずかしさ」があったという。語学力の向上と共に、K 氏は青年会活動へ深く関与していくことになる。

21 歳の時、K 氏は周囲に推される形で地方本部会長に就任する。当初は右も左も分からない状態であったが、組織運営に奔走するなかで、彼女のアイデンティティは「在日韓国人」として強固なものになっていく。大学卒業時には韓国語能力試験（TOPIK）の級を取得し、卒論のテーマにも在日韓国人に関連する話題を選んだ。K 氏はこの時期を「私は誰がどう言おうと、どんな名前で呼ばれようと、在日韓国人だ」という確信を持っていた時期だと回想する。

当時、彼女の生活の中心は青年会にあり、人間関係や活動のすべてがそのコミュニティに費やされていた。この「場所」への没入こそが、彼女の「在日」としての自己規定を支える基盤となっていたのである。

3　社会への進出と「日本人」への回帰

しかし、地方本部会長の任期が終了し、青年会活動から距離を置くようになると、K 氏のアイデンティティは再び大きく揺れ動く。彼女は「会長としての自分を消し去りたかった」と語り、意図的にコミュニティとの連絡を絶ち、プライベートな時間を優先するようになった。

決定的な変化をもたらしたのは、医療事務としての就労経験である。K 氏は業務を通じ、日本の税金や保険料が外国人や生活保護受給者に使われる現状に疑問を抱くようになる。「薬出しすぎじゃない」といった医療費の使われ方に対し、「日本人寄りに考えちゃう」自分がいることに気づいたのである。また、歴史問題や政治的な謝罪をめぐる韓日の言説に対しても、韓国側の主張に違和感を覚え、「いつまで言うんだ」「私たちはちゃんと謝った」と、日本人としての立場から反発を覚えるようになった。

この感覚は、久しぶりに参加した民団の行事（光復節）でも顕著に現れた。かつては当たり前だった「万歳三唱」や愛国的なスピーチに対し、韓国語が理解できるようになったからこそ、「私、ここにいていいのかな」という居心地の悪さを感じたという。日本で生まれ育った自身にとって解放を祝う当事者性がないことに気づき、周囲の熱量との乖離を感じたのである。さらに、二重国籍状態にある K 氏は、韓国の選挙権を行使せず、日本の政治に参加する意思を明確にしている。これは、彼女の生活基盤とリアリティが日本社会にあることを表している。

4　「日本人寄り」という現在地――場所と関係性による自己再編

K 氏の語りからは、アイデンティティが固定的な属性ではなく、所属する「場所」や「関係性」によって流動的に変化する様が見て取れる。青年会という濃密なコミュ

ニティに身を置いていた時期、彼女は「在日」としての自己を確立していた。しかし、そこから離れ、日本社会の一員として労働や納税の現実に直面した時、彼女の意識は「日本人」へと回帰していった。

現在、K 氏は青年会に対し、「仕事仲間」や「政治的な連帯」としての関係ではなく、純粋な「友人関係」としての繋がりを求めている。「元執行部というイメージがなくなったころに戻ってくる」と語るように、彼女にとって青年会は、もはやアイデンティティを闘争的に獲得する場ではなく、気の置けない仲間と楽しむための「親しい場所」として再定義されている。「今は完全日本人寄り」と語る K 氏だが、その日本社会での生活のなかに、かつての仲間との緩やかな繋がりが残されている。それは、イデオロギーや民族的義務感から解放された、彼女なりの新しい在日コミュニティとの距離感なのかもしれない。

2.12　L 氏の生活史：「なんかいい機会」

L 氏：なんかいい機会だし、これからもなんかあれば予定とか合えば参加してみたいな。

L 氏は今年の夏に初めて参加した民団主催のオリニジャンボリーを振り返って上記のように語る。L 氏にとって韓国にルーツを持つことは普段あまり意識されない。時々、偶然の繋がりのなかでルーツを思い起こさせられるだけである。もしかすると、オリニジャンボリーもそうしたできごとの 1 つなのかもしれない。本人は韓国にルーツを持つということを強調することなく、ごく自然な生活実感として語る。その背後には、生い立ち、家族の営み、日常生活のなかでの小さな気づき、そして国籍の問題など、複数の層が静かに作用している。

1　地域に根ざした生育と安定した帰属感

北関東の住宅地で生まれ育った L 氏は在日コリアン 4 世の 20 代女性である。幼少期は大人しいが周囲と仲がよい子どもであったという。高校卒業後に東京の専門学校に行くまで、地元で小学校・中学校・高校へと進学し、地域社会に深く根ざして生活してきた。L 氏が生まれ育った北関東の地は L 氏の母方の祖母の親戚が多く暮らし、L 氏の母親も同じ地域で育ってきたという。L 氏の家庭は大阪出身の祖父が始めた自営業を、母と叔父が継いで暮らしてきた。

L 氏は学生時代を振り返りながら控えめな性格の持ち主と語る一方で、友人関係には困らなかったという。自分から前に出るタイプではないが、明るく活動的な友人たちに囲まれ、その輪のなかに自然に溶け込んでいた。東京の専門学校に進学して以降も、同級生の多くが女性であったこともあって「みんな仲がよく、先生も友達のようだった」と振り返る。L 氏の語りからは、学校生活における帰属感や安心感が一貫して育まれていたことがうかがえる。

現在、L 氏は美容師として働く。そうしたなか、次なるステップとしてアイリストを目指している。美容業界では韓国のヘアスタイルやコスメなど若者世代を中心に需要があるため、将来的に韓国にルーツをもつことも何らかの意味を持つ可能性はあると感じつつ、現在は地元と都内の 2 ヶ所の美容室で仕事をしている。

2　「ハーフ」としての自己認識と国籍をめぐる静かな葛藤

在日コリアンの母親と日本人の父親を持つ L 氏が自分を「ハーフ」と意識し始めたのは、小学校 4 年生ごろであった。「やっと認識するようになった」というその語りは、

衝撃的な発見というより、日常のなかの自然な違和感を少しずつ言語化していく過程のように聞こえる。例えば、祖父と一緒に家族で韓国に行っていたこと、また家ではチェサを行っていたことなど、ごく日常的に韓国的な要素が存在していた。しかし彼女自身は日本生まれ日本育ちであり、生活世界のほとんどは日本社会の規範のなかにあった。

そうしたなか、L 氏は親しい友人には「ハーフ」であることを話していたが、積極的に開示していたわけではない。韓国に毎年のように行く、特に専門学校時代には旅行で年に 3 回訪れることもあったため、会話の流れのなかで自然と話題になることはあった。それでも、彼女は「あんまり言ってなかった」と振り返る。むしろ、彼女が「ハーフ」であることを周囲が知るきっかけは友人を介しての方が多かった。例えば、彼女が通っていた中学校には「ハーフ」の子が多く在籍していて、友人たちの会話のなかで「L 氏もそうだよね」といった形で。

現在、L 氏は日本と韓国の 2 つの国籍を持つ。そうした状況を「謎に二重なんですよね」と笑いながら語りつつも、国籍選択が求められる 22 歳が近づくなかで「そろそろ決めないといけない」と淡い葛藤を述べる。どちらの国籍を選ぶ可能性が高いかとの質問に対し、彼女は「まあ選ぶにしても、きっと日本だろうなとは思ってるんですけど」と語る。そうした語りの背景は生まれてから今まで日本で暮らし周りと変わらない生活を送るなかで、韓国籍を維持する積極的な理由を見つけられないからであろうか。一方で、国籍を選択しない方法はあるか調査員に質問を投げかけてくる姿からは、韓国籍を持つことが自身のルーツを示す 1 つの象徴となっている様子もうかがえる。

3　偶発的なつながりとしての民団経験

L 氏にとって民団との接点は、当初から強固なものではなく、むしろ偶発的な人間関係から生まれた緩やかなつながりだった。現在通っている新宿の韓国学校の土曜クラスも、自分から探し当てたわけではなく、妹の友人とその母親から勧められたことをきっかけに始めたものである。クラスは「小学生から大人までさまざまな年代が参加し、月 2 回ほど韓国語を教えてくれる場」であり、L 氏は妹と共に「月に 1 回ぐらいなら行けるし」という気軽な動機で通い始めた。L 氏自身、これまで「きっかけがなかった」ものの、「いい話が来たし、行ってみようと思って今行ってる」と語るように、韓国語学習は、身近な縁に導かれて始まった生活の延長線上の選択であった。

この韓国語クラスは、単に語学習得の場所というより、家族ぐるみの新しいつながりが生まれる場としても機能してきた。そこで知り合った妹の友達の母親は民団関連の活動に詳しく、さまざまな情報を L 氏一家に提供してくれる。今年の夏に参加した民団主催のオリニジャンボリーも妹の友人家族からの誘いによって知ったものであった。当初、妹の友達が L 氏の妹に「オリンジャンボリーってのがあるから行かない？」

と誘ってくれ、さらに「大人のボランティアもある」と聞き L 氏も参加する流れになったのである。L 氏はこのジャンボリーについて「初めての参加だった」と強調しており、民団行事と深く関わってきたタイプではない。実際に参加した感想については、「楽しかった」という率直な言葉が繰り返される一方、参加していた子どもたちも、ボランティアの人たちもほとんど日本で暮らしている人たちだったという印象を語っている。そのため、「そんなに、なんかすごい韓国を感じるっていうことはそんななかった」と述べつつも、子どもたちが元気で、全体としては楽しい経験だったと振り返る。ここからは、L 氏にとって民団の活動が民族を強く感じる場というより、日本で育ったコリアン同士が緩やかにつながるコミュニティのひとつとして立ち現れていることが想像される。

興味深いのは、L 氏の姉たちが以前に民団の青年会や学生会で活動した経験がある一方で、L 氏自身はそうした活動とはほとんど無縁だったという点である。この対比からは、同じ家庭で育ちながらも、兄弟姉妹間で民族団体との距離感が大きく異なりうることがわかる。L 氏は、自ら民族団体への参加を強く求めてきたわけではない。しかし、家族と友人を媒介にした偶発的な関わりのなかで、韓国語や在日コミュニティとの接触を経験し、それが静かに彼女の生活世界に組み込まれていったのである。

4 「なんかいい機会」——日常に溶け込むルーツ理解

ここまで見てきた L 氏 の生活史を振り返ると、そこには「日本で育ってきた自分」と「ハーフである自分」が、対立することなくゆるやかに共存している姿が浮かび上がる。L 氏 はこれらを明確に言語化して整理しようとしているわけではないが、自身の生活世界のなかに自然に位置づけているように見える。L 氏は地域社会や学校生活のなかでの安定した帰属感を育んできた。そうしたなか、小学 4 年生ごろに「ハーフ」であると認識し始め、家で行われるチェサや頻繁な韓国訪問を通して、自分が韓国ルーツを持つことを静かに理解していった。しかし、その理解は、民族的アイデンティティを強く主張する方向へは進まず、生活の一部として淡く溶け込んでいった。

民団との関わり方にもその特徴がよく表れている。L 氏 が韓国語クラスやオリニジャンボリーに参加したのは、自らルーツを積極的に掘り起こしたいという意思よりも、家族や友人とのつながりによって「なんかいい機会が来たから行ってみた」という偶発性が大きい。そこでの経験は「すごく韓国を感じる場」ではなく、日本で暮らすコリアン同士がゆるやかにつながる日常の延長線上として彼女に受け止められている。

このように、L 氏 の民族的な自己理解には、劇的な覚醒や強い緊張は見られない。むしろ、日常生活のなかで生まれる小さなきっかけ——友人との会話、家族の誘い、偶然の出会い——が、彼女の「韓国と日本のあいだ」にある感覚を静かに形づくっている。国籍選択という制度的な課題を前にしても、L 氏 はそれを深刻な葛藤として語

るのではなく、「そろそろ決めないといけない」という生活の課題として捉えている。彼女の言葉からは、日本で育ったという実感が強く、今後の人生の基盤を日本に置くことも自然な選択として理解されている。L 氏 の語りから感じられるのは、迷いではなく、むしろ「このままでいい」という静かな納得である。彼女にとって「ハーフ」である自分は、特別に強調されるものではなく、自分の生活、家族、過ごしてきた時間のなかで穏やかに息づくもう 1 つの側面に過ぎない。その姿は、在日コリアン 4 世の若者が、自らのルーツを過度に固定化せず、生活のリズムのなかで緩やかに保持していく 1 つのあり方を示しているといえるだろう。

2.13　M 氏の生活史：「在日ってだけで知り合える、ってことは感謝してる。でもそれだけ」

筆者：M の話聞いてたら、在日としての視点、みたいなのがあまりないのかな、って思ったんだけど…。

M 氏：ない。そういうのはあんまりないね。でも、在日ってことでここで会えてるのは嬉しいな、って思う。知り合えない人に出会えてありがとう、って思う。俺は在日だ、っていうのはないな。知るか、って感じ。それでよくない？　あんまり深いこと考えられないもん。[…]在日ってだけで知り合える、ってことは感謝してる。でもそれだけ。先祖のことだって大事って思ってるけど、そんなの当たり前だし、言われなくてもわかってる、って感じ。

上記の M 氏の語りからは、民族的に対する愛着や肯定的感覚といったものは見受けられない。「在日ってことでここで会えてるのは嬉しいな」という言葉にも、それは民族という集団そのものではなく、青年会で得られた友人関係への愛着を表現したものである。ここに、民族を友人関係獲得のための手段として矮小化している様子を読み取ることもできるだろう。しかし、彼の生活史を見ると、民族を通じた友人関係の獲得こそが、彼にとって非常に重要なものであったことが分かる。彼は、在日であることを「知るか」と一蹴するが、在日であることは彼が人生における困難を克服するための重要な資源であったのである。

1　「だから何？」としての在日経験

M 氏は 1990 年代に中部地方で生まれる。父親は日本人、母親は在日韓国人 2 世で、彼自身は日本国籍のダブルである。

自身が在日韓国人のダブルであることを知ったのは中学生のころに母親に告げられたのがきっかけだったという。自身が在日コリアンであることを知った時のことを、「なんか嬉しくて、次の日にはみんなに言いふらしてた。かっこいいだろ、って感じで言ってた」という。当時、M 氏の祖母は彼が在日韓国人であることを「本当は隠したかった」ようだ。「自分たちが苦労したから。在日として生きていくのが辛かったから、M には言うなって母親に言ってたらしい」という。こうした祖母の懸念は杞憂であった。M に対して差別的なことを言う同級生はおらず、「俺自身が結構クラスで明るい、中心的な感じだったから、そういうのものあって自然と受け入れられてたのかもね」と述べる。

もっとも、M 氏にとって在日韓国人であることが重要な意味をもっていたわけでは

ない。この点は、「別に、だから何、って感じだったから、最初はいろんな人に言ってたけど、基本的には気にしてない。今もそう」という語りに表れている。差別を受けた経験もほとんどないため、「在日とか民族とか考えるきっかけがなかった」という。

2　病と移動――人生の転機としての沖縄

M 氏の人生において、最初のターニングポイントは 20 歳の時にやってくる。20 歳の時に大病を患い入院し、退院後に沖縄に移住したのである。一見すると、入院と移住は結びつかないように思われるため、その経過を詳述しよう。

当時、M 氏は高校を卒業してから「2 年くらいはブラブラしてて、仕事もろくにしてなくて、地元のヤツらとつるんでた」という。しかし、20 歳の時に入院する。この時、献身的に看病してくれたのが父親であった。彼の両親は、彼が小学校に入学する前に離婚しており、彼は父親を「正直、くそ野郎だと思ってたし、父親だと思ったことは 1 度もなかった」という。だが、入院した M 氏を毎日見舞う父親の姿は、彼の心情に変化をもたらす。

> M 氏：その時、父親は飲食で 10 店舗くらい経営してて、忙しい人だったんだよ。でも俺が病気した時に毎日会いに来てくれて。その時、医者に癌かもしれない、って言われててたんだけど、その時に父親が「俺が病気になればよかった」って泣きそうな顔して言ってる時に、この人父親なんだな、って思った。[…]父親が、退院の時に「環境を変えたほうがいいんじゃないか、お前は地元に居たらだめだ」、「沖縄につてがあるから 1 人で頑張ってこい」って言って。俺も父親って思えたし、言う事聞いてみよう、って思って、沖縄に行ってみた。[…]俺自身、正直地元のやつとつるんでも将来が狭くなる未来しか見えてなかったから。俺もきっかけが欲しかったんだよね。それも父親の言ったことに従った理由かな。

このように、父親との和解を経て、M 氏は沖縄に移住する。沖縄では、主に土産物店で働きながら、夜はディスコでアルバイトをしていたという。当時の暮らしを「起きてる時間はほとんど働いてた」という。実際、1 日あたり 12 時間以上働いており、休みは週に 1 日程度であったという。「見ず知らずの場所で生きてくのに必死って感じ」だったと述べ、当時の自分を「ほんと、在日 1 世と同じだよ」となぞらえている。

3　孤独のなかで見つけた青年会

沖縄での生活は 3 年続き、23 歳の時に東京に移住する。M 氏が務める会社が東京に

新規店舗をオープンすることになり、彼がその立ち上げメンバーに抜擢されたのである。彼は東京で生活し始めた数年間を「人生で一番辛かった時期」と振り返る。その理由として、休みがほとんどなかったことや、店舗経営がうまくいかなかったことを挙げる。しかし、「友だちがいなかったこと」が最も辛かったという。当時のことを以下のように語っている。

> M 氏：〔店舗は〕全部潰れたよね。途中で会社でも「お前のせいだ」みたいな感じになって、俺は役員じゃねぇし、とかいろいろ思って。そこから卸売の営業してたんだよ。Tシャツとか。それも結構きつくて。何もバックアップもなくて。俺はこうしたい、って言っても無視で。それが結構しんどくて。[…]それに、俺、東京に全然友達いなかったわけ。だから、しんどいのも全部自分で抱えないといけなくて。そこが一番辛かった。沖縄の時よりもずっと孤独感があった。

この体調を崩してしまい休職する。そして、実家に帰省した際に姉に自身の生活環境について相談したところ、青年会を紹介されたという。これをきっかけに、彼は2016 年から青年会に参加するようになった。当初は「自分がやってる仕事とつながったらいいかな、って思ってて。団体の T シャツとか受注できればいいのかな、って。俺も仕事してて、お金になればいいな、って思って。最初はそういうノリ」だったという。しかし、実際に青年会に参加するにつれて、考えが変化したという。

> M 氏：いざ行ってみたら普通に楽しい会で。俺、沖縄から東京に来て友達居なかったから、そういうところはいいな、って思ったね。だからだんだん変わったな。俺の最初のきっかけはビジネスだけど、俺も友達いないしな、って思って入ったところもあるよね。やっぱり、仕事も辛かったし。で、気づいたら俺、東京に全然知り合いっていうか、友達いないな、って思って。だから同年代の友達できて、嬉しかったわけ。それがあるから青年会に顔出してるし、じゃないと顔出さないし。やっぱ青年会入って友達増えたもん。そこは在日でよかったって思う。

ここまでの M 氏の生活史をみても分かるように、彼の青年会への参加は強い民族意識に裏打ちされたものではない。彼にとって青年会は転居に伴う「人間関係の欠乏」という生活上の困難を解消するための場として、機能しているのである。これが、筆者が冒頭で「在日であることは彼が人生における困難を克服するための重要な資源であった」と述べる所以である。すなわち、彼が「人間関係の欠乏」を解消することができたのは青年会に参加したからである。そして、なぜ彼が青年会に参加できたかといえば、彼が在日コリアンであるからにほかならない。

従来、青年会や民団を始めとした民族団体は、社会運動を通じて、在日韓国人への差別を撤廃してきたという歴史を持つ。こうした機能の重要性は疑いえない。しかし一方で、M 氏の事例は民族団体が、より日常に密接に関連した生きづらさの解消に寄与していることを伝えている。 民族団体には日常的な困難の緩衝装置としての一面があることを彼の事例は伝えている。

2.14　N 氏の生活史：「プライオリティが自分のなかで上の方に来なかった」

N 氏：もちろん興味はあるけど[…]いろいろあった時にプライオリティが自分のなかで上の方に来なかった。

N 氏は商工会に関わる父の関係で幼少期から民団のイベントなどに参加してきた。しかし、それはどれも単発的に終わって継続した参加にはつながってこなかった。そうした理由について N 氏は上記のように語る。決して、在日コリアンとしてのルーツに関心がないわけではない。むしろ、日常的に意識はしている。ただ、民族団体の活動に結びついてこなかっただけである。そして、そこには N 氏の生い立ち、家族の営み、学校生活が様々な形で折り重なった結果として作り出された現在の N 氏がいる。

1　「恵まれた」生育環境と「プライオリティ」としての学校生活

関東地方にある大都市の郊外で生まれ、幼少期の大半をそこで過ごした N 氏は、在日コリアン 3 世の 20 代後半男性である。現在、国籍は韓国。父はパチンコの換金所など様々な事業を営み、経済的に比較的安定した家庭環境で育ってきた。先祖の命日には小さなチェサを行ったり、両親はサッカーの試合で韓国を応援するなど家庭のなかに韓国的な要素が淡く存在していたことは確かで、親戚が民団の活動を支援していたことなど、在日韓国人のコミュニティへとつながる縁も静かに息づいていた。

幼稚園から高校まで私立の一貫校に通ってきた N 氏は通名こそ使用していたものの、在日韓国人であることを周囲に話し、それといって周囲から特別視されることもなく自然に学校生活に馴染んでいった。幼少期を振り返る N 氏の語りには、「恵まれていた」という言葉が何度も登場する。差別的な経験はほとんどなく、友人関係も安定していた。韓国系であることを理由とした明確な排除を受けた記憶もないという。

こうした環境のなかで、N 氏にとって部活動などの日常的な学校生活や幼稚園から高校まで一緒に過ごしてきた友人との関係が彼の「プライオリティ」となってきたのである。そして、それは現在も変わらない。一方、ルーツが何も意味を持たなかったと言うわけではなく、人生の節目ごとに様々な交渉を迫られている。

2　ルーツの意識化と名前の使い分け

N 氏が自身のルーツを少しずつ意識し始めたきっかけとして、2002 年の日韓共催のワールドカップが挙げられる。小さいころからサッカー好きだった N 氏は自分が生まれ育った日本を当然のように応援していた。すると、父に「お前は日本人じゃないよ」と言われ衝撃を受け、「めっちゃ泣いた」ことを記憶している。ただ、それは決して日

本人でないから泣いたわけではなく、周りが日本を応援するなかで自分だけ応援できないのではと思ってのことであったという。

N 氏が韓国にルーツを持つことを周りに伝えるようになったのは小学校高学年になったころからである。当時、ある同級生が自然体で「母が韓国人」と話す姿を見て、「あ、言っても大丈夫なんだ」と感じたと語る。それは劇的な瞬間というより、日常のやり取りのなかで静かに生まれた気づきであった。

その後、中学校に上がると韓国にルーツがあることを周囲に積極的に伝えるようになる。その理由について N 氏は、ありのままを知ってほしいとの思いと目立ちたかったとの思いが混在していたと語る。また、N 氏が通っていた中学校では海外への修学旅行があり、その段階になってパスポートの色などで「ザワザワみたいになるの嫌だった」とも語る。いずれにしても、N 氏にとって韓国にルーツがあることの開示を可能にしたのは幼稚園時代から一緒に育ってきた多くの友人たちの存在と安定した人間関係であった。

現在、N 氏は、以前ほど在日韓国人であることを周りに語っていないという。そこには、大学また就職後の経験が影響している。大学進学後、N 氏はイギリスへの留学を経験する。そこでパスポートの記載名との齟齬を避けるため初めて韓国の名前を使用する。しかし、語学学校での説明会で韓国人のグループに組み込まれるなど、本国から来た韓国人と触れ合う機会が生まれると彼らとの大きな差を感じたという。また、日本に帰国後、イギリス留学中に使うようになった本名で就職活動に挑戦してみたところ、電話で国籍を尋ねられその場で募集を締め切ったと言われたこともあったと語る。そうしたなか、現在、スポーツ用品の輸入会社で仕事をする N 氏は日本名を使っている。名前を日本名に戻した理由を尋ねると、「もっと企業に欲しいって言ってもらえる人間」になったらまた韓国名を使えるかもしれないと語る。

これらの語りからは、N 氏にとって韓国のルーツを持つことを語るにはしばし安定した人間関係を持つことが前提となってきたことがうかがえる。そうした意味で、在日コリアンであることは環境による影響を敏感に感じる媒介の 1 つで、彼の人生にとって常に一定の意味を持ってきた。N 氏は今後どのような経験をし、いかなる感情の変化を経験するのだろうか。注目に値する。

3　民団との断続的接点

N氏の民団との最初の接点は、小学3年で参加したオリニサマーキャンプであった。本来は 4 年生から対象だが、人数不足を理由に父親伝に誘いがあり、例外的に参加したのだという。キャンプでは簡単な韓国語を習い、与えられた小遣いで買い物をしたり、各地から集まった同世代の在日韓国人の子どもたちと交流したりした体験が印象に残っている。その後も小 6 まで連続して参加し、韓国本国で開催されるオリニジャ

ンボリーにも足を運んだ。

これらの幼少期における積極的な民団とのつながりは家庭側の組織とのつながりが背景として存在していた。祖父の兄が民団に資金的な支援をしていたことや、父親が商工会を通じて民団のネットワークを持っていたことから、N 氏の生活世界には民団が遠くないところにあった。そうしたなか、高校生のころにもう一度、民団主催の母国研修に参加したことがある。それは、幼少期に参加したオリニのイベントが楽しかったという記憶があったからであった。しかし、高校時代に参加した母国研修では歴史の話が中心となって、あまり楽しくなかったと語る。そのころから民団の活動とは疎遠になっていったという。その後、民団主催の成人式にも参加し、数年間は年に数回イベントに顔を出していたが、現在はほとんど参加していない。

20 代後半になった N 氏の交友関係の中心は、今でも幼稚園から高校までを共にした友人たちである。これらの友人との関係は在日コリアンである N 氏をありのままとして受け止めた上で成り立っている。そうした意味で、これらの友人関係はルーツに関係ない一方で、ルーツを無視するわけでもない。この安定した人間関係こそ N 氏にとっての「プライオリティ」であって、在日韓国人として集まる場がなくても在日韓国人として生きられる場となっている。

4　日常の背景としての民族性――友人関係が支える「揺れながらの安定」

N 氏の語りを全体として見渡すと、彼にとって韓国にルーツを持つことは、誇張して語るべき特別な物語でも、抑圧の象徴として抱え込むべき問題でもなかったことが浮かび上がる。しかし、それは無関心の結果ではない。むしろ、家族の営み、学校での生活、安定した友人関係、そして民団との断続的なつながりといった複数の要素が、長い時間をかけて静かに作用し続けた結果として、日常の背景にたしかに存在するものとしての民族性が形成されてきたといえる。

N 氏は成長の過程で、韓国ルーツをめぐって大きな葛藤に直面したわけではない。しかし、自分が応援しようとしたサッカーの日本代表を父にとがめられたできごとや、学校で同級生が韓国ルーツを自然に語る姿を見た場面など、日常のなかに点在する小さなできごとが、彼の民族意識に穏やかな輪郭を与えてきた。それらのできごとは劇的ではないが、時間をかけて沈殿し、N 氏にとっての当たり前と違和の境界を形づくっていった。

さらに、大学での留学経験や就職活動の過程で、N 氏は自らの民族性を社会にどう開示するかという問題にも向き合った。韓国名でエントリーした企業から国籍を理由に断られた経験は、彼に民族性が社会の力学のなかで可視化されてしまう場面があることを実感させた。一方、現在日本名を使うという選択は、彼が自分の能力や環境を冷静に見つめながら、もっとも自然だと感じる形で自らのルーツを扱っていることを

示している。

民団との関わりにおいても、彼は強い帰属意識を持っていたわけではない。幼少期のオリニキャンプや母国研修は、確かに在日コミュニティに触れる機会となったが、その後の人生で民団活動が優先順位の上位に来ることはなかった。しかし、それは民団に距離を置きたいという拒絶ではなく、むしろ彼にとっての「プライオリティ」が学校生活や部活動、長年の友人関係など別の領域にあった結果にすぎない。この優先順位の配置こそが N 氏の生活史に特有のものであり、在日韓国人としてのあり方は決して単線的ではなく、人が置かれた環境や人間関係の性質によって大きく変わりうることを示している。

現在の N 氏を支えているのは、幼稚園から高校まで続く友人関係である。ここでは彼のルーツは過度に強調されることも否定されることもなく、そのままの N 氏として受け止められている。この安定した関係性こそ、彼が自分の民族性を無理に語る必要も、逆に隠す必要もなく生きられる場になっている。つまり、N 氏にとって在日韓国人であることは、特別に意識しなければならないものではなく、彼の生活世界を構成する 1 つの要素として穏やかに定着しているのである。

こうした N 氏の歩みは、在日コリアンの民族性が、必ずしも強烈なアイデンティティの自覚やコミュニティ参加を通じて形成されるわけではないことを教えてくれる。むしろ、日々の生活のなかに散在する経験の積み重ねが、自然に人の自己理解を形づくりうることを示している。そして何より、N 氏の語りには、激しく主張しないことを可能にする揺れながらも安定した位置がある。その位置から彼は、自分の能力や環境を見つめながら、自身の民族性を日常のなかに静かに調和させている。

N 氏の生活史は、在日コリアンの民族的自己形成の多様性を鮮やかに映し出す一例であり、人がどのように自分のルーツと距離を取ったり結びつけたりしながら生きていくのか、その複雑で繊細な過程を丁寧に示しているといえるだろう。

2.15　O 氏の生活史：「違いを強みに」

O 氏：どちらでもないなと思って帰ってきた。韓国語も歴史も知って、でも、韓国人でも日本人でもない。在日っていう別のものなんだなって。[…]前はなんか自分が正しいとか、かっこいいっていうか、ちょっと特別な人間なだけだと思うんですけど、別にそういうわけじゃなくて。いろんな人がいていいし、でも自分の経験とかを伝えることによってなんかプラスになったりとかする可能性があるんだったら、結構自分がそれがやりたいことに近いなと思って。

インタビューにおいて O 氏は、自身のアイデンティティを「韓国人でも日本人でもない」と位置づけた上で、その曖昧さを肯定的に認識しているように見受けられる。彼が到達した「違いを強みにする」という思想は、どのような経験を経て形成されたのだろうか。本稿では、彼が経験した「在日」をめぐる葛藤と、場所を変えながら自己を再定義していったプロセスを記述する。

1 「在日エリート教育」と「劣等感」

O 氏は 1990 年代に九州地方で生まれた男性である。国籍は韓国。家族は両親と、弟が 1 名、妹が 2 名いる。祖父母は同じ県内に住んでおり、しばしば親に連れられて家を訪れることがあったという。

生育期の彼の環境は、「在日エリート教育」と自身が形容するほど、民族的な色彩の強いものであった。特に影響を与えたのは母方の祖父である。祖父の家は地域の在日韓国人の「たまり場」となっており、毎晩のように人々が集まり、マッコリを飲み、花札をし、韓国の音楽やテレビに親しむ風景が日常的に存在した。祖父は知識人であり、O 氏にハングルでの名前の書き方や韓国語の挨拶、生活上の礼儀作法を徹底して教え込んだ。以下の語りは祖父の人柄や、祖父の家での雰囲気の一端を伝えるものである。

O 氏：〔祖父は〕民団愛がまず強いっていうのは間違いなかった。寝ても覚めても活動してるみたいな。困ってる人がいたら金貸してあげたりとか。なんか手伝ってあげたりとかして。日本人と俺たちは違うんだとか、戦おうねみたいな、そういう感じの人じゃなかった。[…]〔祖父の家が〕炭鉱が近かったので、炭鉱に行ってる慰安婦の人とかもいたりとかして、女の人たちがなんか夜な夜な泣きながらなんか語ってて、なんか悲しい話してて。で、みんなも一緒に泣いてるみたいで。後々考えてみたら、なるほどそうだったみたいな。そういう、慰安婦の辛い思い出とか話して、みんなで慰めて、とかそういうのは結構ちっちゃい時から見

てた。

上記の語りにみられるように、祖父母の家を訪れた際は、民族や在日を身近に感じる環境であった。一方で、自宅に戻ると、そうした空気は希薄になった。彼は幼少期から、民族的な空間と日本社会的な空間を行き来する「二拠点生活」を送っており、そのギャップを肌で感じながら成長した。この環境を通じて、彼は「自分は周囲とは異なる背景を持っている」という自覚を抱くようになった。

もっとも、「周囲と違う」という感覚は、O 氏にとって自己開示をためらわせるものではなかった。実際、小学校時代の O 氏は、自身が在日コリアンであることを隠すことなく、むしろ積極的に周囲に発信する子供であった。卒業証書には日本名と民族名を併記させるなど、その態度は堂々としたものであったが、それは同時に、ルーツを隠そうとする同級生との差異を際立たせることにもなった。たとえば、彼の同級生には彼の他に在日韓国人がいたが、その子は自身の民族性をひた隠しにしていた。O 氏自身、その子が在日韓国人であることを知ったのはその子が転校する間際である。転校していく際、「君が堂々としているのが羨ましかった」と言われたという。こうしたできごとを通じて彼は、在日韓国人であることをどのように受け止め、表出するのか、ということに個人差があることを認識した。

このように、彼は祖父母の家以外では民族が比較的希薄な環境で生活していた。そしてそうであるがゆえに、「在日についてもっと深く知りたいっていうか、何者なんやろうみたいな話をしたかった」という。そして、高校進学後にその機会が訪れる。O 氏は朝鮮奨学会の集まりを通じて、朝鮮学校出身の同世代と出会ったのである。この環境は彼が望んだものであったが、実際には、強烈な「劣等感」を抱くことになった。彼らは韓国語を流暢に操り、歴史や文化への造詣も深かった。「在日エリート教育」を受けてきたという自負があった O 氏だが、制度的な民族教育を受けてきた彼らを前に、「自分は何も知らない」という恥ずかしさを感じたのである。しかし、この出会いは彼に「もっと知りたい」「語り合いたい」という欲求を喚起させ、民族的な知識やアイデンティティを探求する原動力となった。

2　韓国留学と「在日」としての自覚

O 氏は小学生のころから教員になることが夢であった。小学生のころに、「僕が在日ってことをさらけ出して生きてることに対して、いいね、ってくれる先生」と出会い、「俺もこんな風になって、例えば子供とかにそういう風にしてあげられたらな」と思ったのである。そして実際に彼は、高校卒業後、地元の教育大学に進学する。

ここで簡単に学校教員に関する制度について説明したい。学校教員には、「教諭」と「講師」という 2 つの地位があり、「講師」は学年主任といった管理職に就くことがで

きないといった待遇の差がある。日本の多くの自治体では、外国籍の場合、「教諭」にはなることはできない。すなわち、O 氏が「教諭」として働くには帰化をして日本籍を取得する必要があった。

O 氏もこの点は理解していたが、大学入学時には「頭が痛い話だから考えないで」いたという。実際、真剣に考え始めたのは大学 3 年生のころだという。当時の考えについて、彼は以下のように語っている。

> O 氏：やっぱりこう、簡単に決めていいことではないなとっていう気持ちがすごく強くて。本音は〔国籍を〕変えたくない。でも、教師になるためには変えた方がいいのかな、みたいな。だから、自分の信念を貫くか、夢をとるかって感じで。[…]国籍が日本に変わってしまったら、自分のアイデンティティが失われていくんじゃないかなって、その時は思ってて。でも、その当時がソフトバンクの孫さんも活躍されてたし、だから、こういう生き方もあるんだ、っていうのもあって。自分のルーツ生かして、民族名で先生になるみたいな、そういうのも 1 つ、自分のアイデンティティの表現の仕方だなっていう思ったりして。そういうので迷ってました。

O 氏はこうした悩みの結果、韓国へ留学することを決心する。「なんか日本のことはよく知ってるけど、やっぱ韓国のこと全然知らん」自分の存在に行き当たり、「全然知らないからこそ、決める材料がなかった」からである。

この留学は、O 氏にとって「自分が韓国人なのか日本人なのかをはっきりさせるため」のものであり、彼が「韓国人になれるのか」を確かめるための旅であったということもできる。しかし、皮肉にもそこで得たのは「韓国人にはなれない」という確信であった。現地で買い物をした際、店員から「韓国語が上手ですね」と褒められた経験は、彼にとって象徴的なできごとであった。言語能力を称賛されることは、裏を返せば、彼がその社会における「異邦人」として認識されていることを意味していたからである。

また、留学先で出会った世界各国のコリアンたちの存在も、彼に大きな影響を与えた。ブラジルやアメリカから来た彼らは、韓国籍を持たずとも強い民族意識を持っていた。以前は「国籍を変えることはアイデンティティを失うこと」と考えていた O 氏だが、こうした出会いを経て、国籍とアイデンティティの関係を相対視することができるようになる。結果として、彼は「韓国人でも日本人でもない、在日という別の存在」としての自己を受容して帰国することとなる。この時にはすでに、教員ではなく、「在日としての強み」を活かす道に進むことを決心していたという。

3　「違いを強みに」なる場としての青年会

留学経験は O 氏のアイデンティティ形成において非常に大きなインパクトを残したが、一方で、青年会に参加するきっかけにもなった。なぜならば、留学に際して民団から奨学金を受給していたのである。O 氏は奨学金の面接の際、民団の幹部から「帰ってきたら同胞社会に貢献するつもりはあるか」と尋ねられたという。そしてこの問いに対して「面接だから調子いいこと」を言ったところ、「帰ってきたら青年会に入ってね、ってなった」という。「お金もらった恩もあるし、面接で言った以上、行かないわけにはいかない」と考え、実際に帰国してから青年会のイベントに参加するようになった。

もっとも、大学生のころは、積極的に青年会の活動に参加していたわけではない。O 氏は、「全然面白くなかった」「留学行って、ちょっと視野を広く持った気になってたんでしょうね。みんなで集まって飲み会するだけで、何が楽しいんだろうみたいなところがあった」と語る。そのため、数回参加したのみでほとんど青年会に参加していなかったという。

大学卒業後、O 氏は「グローバルに活躍する」という新たな理想を掲げ、大学卒業後、フィリピンへの留学とインターンシップを経験する。しかし、家族の事故を機に日本へ緊急帰国することとなった。再び青年会に参加するようになったのはフィリピンから帰国して数年が経ってからである。当時について、「正直、雰囲気は全然変わってなかった」というが、一方で「自分も大人になったのか、みんな自分なりに楽しめればいいし、こういう形もいいよね、って受け止められるようになった」という。そして、青年会に再び参加するようになった直後、地方本部会長を打診される。O 氏は当時のことを以下のように振り返る。

> O 氏：もう次の会長がいなくて、僕が引き受けるか休会するか、みたいな感じで。執行部もいるんですけど、会長だけは絶対にみんなやりたくないって状態。だからほんとに断りに断られて自分のとこに来たんだろうなっていうのも表情見てもすごいわかったし。なんか俺の手にさ、会がかかってるみたいな感じで。やめてくれよ、まだ何もやってないし、そもそもやろうともしてないのにいきなり、っていうのが正直なところで。[…] でも、こういう場がなくなるのは寂しいなっていうのはありました。自分みたいにこれから参加していこうって人がいなくなりますし。[…]それに、自分の経験とかを伝えることによってプラスになったりとかする可能性があるんだったら、結構自分がやりたいことに近いなと思って。誰しもができるものでもないし。みんな喜ぶだろうなと思って。おじいちゃんとかは死んでたんですけど、僕に在日の魂を吹き込んでくれたおじいちゃんとかも絶対喜ぶだろうし。そういういろんなので引き受けました。

このように、O 氏は地方本部会長を引き受けたが、「正直、なかなかモチベーションが上がらなかった」という。しかし、地方本部会長になったことをきっかけに青年会での交友範囲も拡大し、「地方本部の会長すると顔が広くなるじゃないですか。会議とか行事で会う機会が自然と増えますし。そうしたら全国に仲間ができる。そういうのはやっぱ楽しい」と語る。

O 氏は地方本部会長の 2 年目からは中央執行委員会のメンバーにもなり、現在に至るまで中央本部の一員として活動している。彼は役職ある立場で活動する際の心がけとして、「青年会に参加してくれる人、関わってくれる人はみんな幸せになってほしいなっていう気持ちは、地方の会長になった当時から変わってない」という。そのうえで以下のように語る。

> O 氏：本当に、違いを強みにっていうのが僕にとってキーワード。違いが強みになるからこそ、在日に生まれてよかった、ってそういう風に思ってもらえるきっかけの場所に青年会がなったら一番嬉しいな、っていうのがあります。

O 氏にとって、青年会での活動は、自身の歩みをひとつに結び直す場所である。幼いころ祖父母の家で培ったアイデンティティや、韓国留学で痛感した「在日としての自分」、そして多様な仲間と出会った青年会での経験が、すべて「違いを強みに」という現在の信念につながっている。「在日」という立場は、単一の形に収束するものではなく、それぞれの経験や価値観のなかで異なる姿をとる。O 氏は、その違いを否定するのではなく、互いの差異を認め合うことこそが次の世代につながる力になると考えている。「違いを強みに」という言葉のなかに、彼が多くの場所を経て見出した、多様な「在日」を肯定する意思を読み取ることができるだろう。

3　考察

2 章では 15 名の在日韓国人青年の生活史を記述してきた。これらは、一人ひとりの在日韓国人青年が、いかに生きてきたのかを示す重要な「物語」である。本章では、これまでの生活史の記述を踏まえ、①在日韓国人青年のアイデンティティ形成、②在日韓国人青年の生きづらさ、③民族団体の意義といった 3 つの点に注目して考察を進めていく。

3.1　在日韓国人青年のアイデンティティ形成

ここではまず、在日韓国人青年のアイデンティティ形成について考察していく。特に、現代社会における在日韓国人青年がいかにしてアイデンティティを形成しているのか、という点に焦点を当てる。

始めに指摘しておきたいことは、現代の在日韓国人青年にとって、在日韓国人であること、または、韓国にルーツがあるという「事実」は、在日韓国人としてのアイデンティティの絶対的な根拠ではない、ということだ。たとえば、「アイデンティティがあるかないかって言われたら、ない」と語る A 氏の事例はその代表例である。彼女の場合、ダブルで、国籍が日本であるという事情もある。しかし、本報告書に記載できなかった他の対象者のなかには、両親がともに在日韓国人で、国籍が韓国であっても、「特段在日であることを意識したことはない」と語る人びとがいた。また、I 氏と O 氏は異口同音に国籍とアイデンティティが直結するわけではない、という旨のことを語っている。これも国籍という客観的な指標が、アイデンティティの絶対的な根拠になるわけではないことを伝えている。

ルーツとアイデンティティ形成という観点からみると、H 氏の事例も興味深い。11 歳まで韓国で生活していたことから、彼は韓国文化のなかで社会化された存在である。しかしながら、韓国からの留学生のズレを認識するなかで、「半韓国人半日本人」というアイデンティティを獲得している。彼の事例は、アイデンティティ形成はルーツという単一の要因から直線的に導出されるのではなく、生活の経験のなかで形成されていることを示している。

それでは、ルーツが必ずしもアイデンティティ形成の中核ではないのであれば、何がそれに該当するのだろうか。本報告書で記述した生活史を眺めると、アイデンティティ形成の過程において、「関係」と「実践」が重要な要因となっていることが分かる。前者は、家族や友人といった他者との関係性のなかで、「在日であること」が実感されるというプロセスを指している。また後者は、韓国語学習や国民儀礼の実施といった行為を通じて、民族性を獲得するプロセスを指している。それぞれのプロセスに関して、より事例に即して説明していこう。

3.1.1 「関係」を通じたアイデンティティ形成

在日韓国人青年にとってアイデンティティは、国籍や血統・ルーツといった客観的な指標にもとづいて自動的に形成されるものではなく、他者との関係のなかで立ち上がるものである。彼・彼女たちの語りに共通しているのは、在日としての意識が家族や友人といった具体的な関係のなかで形成され、変化していくという点である。

たとえば、D 氏の語りは関係性のなかで「在日であること」を再定義するプロセスを映し出している。彼女は、チェサなどを通じて幼少期から民族文化に親しんでいた。しかし、高校進学時には民族名を名乗るかどうかで葛藤した。最終的には日本名を使い続けつつ、自らのルーツを公言するという選択をしたが、それは「自分が生きてきた名前を捨てたくない」という感情と「ルーツを隠したくない」という意志の間で導き出された折衷であった。この語りが示すのは、アイデンティティとは他者との関係のなかで自らを何者として／どのように位置づけるかを模索する実践だということである。彼女が日本名を使っても在日として生きていることを語る時、そこには文化や血統の純粋性よりも、関係のなかで柔軟に自己を呈示するアイデンティティのあり方が表れている。

E 氏の経験は、この関係を通じたアイデンティティ形成のあり方をより動的に示す。小学生のころ出自を知られ、「韓国人なんやろ」と言われたことをきっかけに、在日韓国人であることを「弱み」と感じた彼は、長く沈黙を続けていた。しかし、高校野球部で出自を公表しながらキャプテンとしてチームを率いた経験が、自己理解を大きく変える。「監督は『そうなんですね』と言っただけで終わり、むしろハングリー精神を買ってくれた」と語るように、E 氏は関係のなかで肯定される経験を得た。その後の青年会参加は、この成功体験を新たな集団のなかで再演する機会でもあった。「弱い組織を盛り上げたい」という言葉に象徴されるように、彼は他者と共に課題を乗り越える過程そのものを通じて、在日韓国人であることを誇りとして再構築している。

F 氏もまた、青年会や学生会といった場を通して、「在日としての自分」を他者との関わりのなかで確かめている。恋人の親から出自を理由に交際を否定された際、彼女を支えたのは青年会や学生会の仲間だった。ここでは、「共感し合える」「話が通じる」という感覚が深い意味を持つ。彼女にとっての民族意識とは、理念ではなく、共に笑い、支え合う具体的な関係性のなかにある。

このように、D 氏、E 氏、F 氏の語りはいずれも、在日としてのアイデンティティが「関係的な生成過程」を持つことを描き出している。家庭・友人・青年会といった場は、彼らにとって自己の境界を確かめ、他者とつながり直す契機である。血統や国籍によって与えられるアイデンティティではなく、他者との関係のなかで日々生まれ変

わるものとしての在日。そこにこそ、現代の在日韓国人青年が生きる「アイデンティティのかたち」がある。

もっとも、国籍や血統といった客観的な指標が、アイデンティティとまったく無関係である、と断じることには慎重にならなければならない。たとえば、在日としてのアイデンティティはないと語る A 氏は、「1 つ名前とか、韓国って分かるものがあればまたちょっと違う認識だったかもしれない」と、自身のルーツを示す客観的要素があれば、アイデンティティのあり方が今とは異なっていたかもしれない、と語る。また、K 氏は在日コミュニティにおいて日本名で呼ばれることで疎外感を感じていたという。これもまた、K 氏にとって民族名が在日韓国人のアイデンティティの中核であることを示唆している。加えて、韓国にルーツがありながらも韓国語を理解できないことを「恥ずかしい」と語る人びとも複数人いる。

図式的にまとめると、かつて在日社会では、在日韓国人のメンバーシップ、すなわち「誰が在日韓国人なのか」を確定する指標として、国籍や血統、民族名といった要素が重視されていた。一方、国際結婚や帰化の増加により、この問いにおいて、アイデンティティの重要性が高まった。すなわち、国籍といった指標よりも、「自身を在日韓国人と自己規定しているか」ということが、在日韓国人を定義するうえで重要な指標として浮かび上がるようになったのである。

しかしながら、現実はこうした図式的な理解に収まるものではない。在日韓国人のアイデンティティは国籍をはじめとした指標と独立したものなのか、それとも、現在もなお重要な関連をもっているのか。この点に関して考察することは最終報告書での課題としたい。

3.1.2 「実践」を通じたアイデンティティ形成

在日韓国人青年の語りをみると、アイデンティティは関係のなかで生成されるだけでなく、具体的な実践を通して更新されるものであることが分かる。ここでいう実践とは、単に民族的な活動に参加することを指すのではなく、自らの立場を意識化し、それを行為として表現しようとする営み全般を意味している。青年たちはさまざまな行為を通じて、自らのアイデンティティを能動的に形成している。

たとえば E 氏の語りには、行為を通じて自己を再構築するプロセスが見られる。彼は高校時代に野球部のキャプテンとしてチームを率いた経験を「弱いものを強くする」実践として語る。社会人になって青年会に参加した際も、「停滞している組織を盛り上げたい」と述べ、その行動原理を再演している。彼にとって青年会での活動は、単なる民族運動ではなく、「自分を鍛える場」としての意味をもつ。こうした、組織を率いる経験を E 氏が「在日だから頑張れた」と語る時、彼は自らの行使を「在日としての

行為」として解釈し、実践しているのである。そして彼が「頑張ること」を民族に引きつけて解釈するには、祖母や母親の在日韓国人としての歴史が息づいている。すなわち、民族性は彼にとって理念ではなく、自身の行為を意味づける解釈枠組みとして機能しており、この枠組みは、彼の家族の歴史を背景に成立しているのである。

また、C 氏の事例は、身体的実践を通してアイデンティティが形成されるプロセスを示している。彼女は青年会の国民儀礼で「ウリナラマンセー」と歌う時、最初は違和感を抱いていたと語る。しかし、繰り返し歌ううちに自身も「ウリナラの一部」と感じるようになったという。ここで重要なのは、理解や意識の先にある、身体的な感覚を通した同一化のプロセスである。儀礼の繰り返しは、記号や理念としての民族ではなく、身体を媒介にした「生きられる民族性」を生み出す。この身体的実践によって、彼女は在日韓国人としての感覚を「考える」のではなく「感じる」ものとして獲得している。

加えて、国民儀礼という実践がアイデンティティ形成に結びつくもう 1 つの理由として、日本社会との隔絶があげられると考えられる。すなわち、多くの在日韓国人が一堂に会し、韓国の国家を斉唱するという場面は、彼・彼女たちが日常生活を送る日本社会では起こりえないものである。すなわち、国民儀礼という実践が、日本社会と在日社会の境界づけるメルクマールとして機能しているのではないか、ということだ。こうしたことを踏まえると、国民儀礼は自身が在日社会の一員であることを印づける顕著な実践であるということができるだろう。

このように、E 氏や C 氏の語りはいずれも、「在日であること」が関係的に与えられるだけでなく、自らの実践を通じて生み出されるプロセスであることを示している。民族的アイデンティティは保持されるものではなく、行為を通じて生成される可変的で創造的な営みとして理解できる。つまり、在日韓国人青年の「在日であること」は、与えられた属性ではなく、行いのなかで生きられる経験であり、その実践のなかにこそ、現代的な民族性の新しいかたちが表れている。

一方、実践を通じたアイデンティティ形成は C 氏や E 氏のように、能動的なかたちでのみ現れるわけではない。家庭内で不知不識のうちに行っていた民族的な慣習が、自身の民族性の萌芽となる場合も多数見られる。B 氏や J 氏、O 氏のように、家族や親族との生活のなかで「当然」のように民族文化に触れ、「自然と」自身が在日韓国人であることを知った人びとの事例は、この点を鮮明に伝えている。

もっとも、家庭内での民族文化は、それを行っていた時点で「民族文化」と認識されていたとは限らない。むしろ、その後の生活史のなかで「当たり前」のように行っていたことが「民族文化」としての意味を付与される、といった側面がある。たとえば、B 氏は家庭内での「民族文化」を「そういうもんかな」と特に疑問に思うことなく受け入れていた。しかし、小学校に通うようになり、日本人に囲まれる生活を送るようになって「周囲とは異なるもの」として認識するようになる。こうした事例は、

当事者がある実践を必ずしも「民族文化」として認識しているわけではなく、日本人との差異を認識することなどを通じて「民族文化」としての意味を付与するというプロセスが存在することを示唆している。

以上の事例から確認できるのは、在日韓国人青年にとってのアイデンティティ形成が、日常的・反復的な実践を通じて徐々に編み上げられていく過程であるという点である。それは、自らの行為を「在日としての実践」として意味づける能動的な営みとして現れる場合もあれば、後から振り返ることで初めて民族的実践として再解釈されるような、非意図的で生活に埋め込まれた実践として現れる場合もある。いずれの場合においても重要なのは、「在日であること」が行為や慣習、経験を通じてその都度立ち上がり、更新されていくという点である。こうした理解に立つと、在日韓国人青年のアイデンティティは、固定的なものではなく、関係と実践のなかで生成され続ける動的な経験として捉え直すことができるだろう。

3.2　在日韓国人青年の生きづらさ

前節の最後に、在日韓国人と日本人の差異への認識について言及したが、日本人との差異は、「差別」や「生きづらさ」といった文脈において非常に重要な論点となる。なぜならば、長い間、差異こそが在日韓国人への差別の根拠とされてきたからである。

現在においても差別や生きづらさといった問題は在日韓国人青年にとって重要な問題であり続けている。そこでここでは、対象者の語りをもとに、現代の在日韓国人青年の生きづらさについて考察をしていきたい。

3.2.1　露骨な差別と否定的なまなざし

一般に、戦後日本社会における在日韓国人に対する差別は、法制度の整備や市民社会の成熟とともに「過去のもの」として語られる傾向にある。実際、就職や結婚、教育などの領域ではかつてのような露骨な排除は減少し、メディアや教育現場でも多文化共生の理念が広がっている。しかし、対象者の語りをみると、差別が単純に解消されたとは言いがたい。むしろ差別は現在も確かに残っており、また、より微細な形で日本人からの否定的なまなざしを感じざるを得ない場面があることを伝えている。

たとえば、B 氏や G 氏のエピソードは現在もなお露骨な差別が学校空間で行われていることを伝えている。G 氏は同級生から「キムチ野郎」と差別発言を受けており、B 氏は小学生のころに凄惨な暴力を受け、また、高校生のころには机に「金正日死ね」と教員に書かれた経験を持っている。

さらに、M 氏や N 氏の事例も重要である。彼らは実際に学校で差別を受けなかった

が、在日韓国人青年が現在も差別を「可能性」として考慮せざるを得ないものであることを伝えている。M 氏の場合、「俺自身が結構クラスで明るい、中心的な感じだったから、そういうのものあって自然と受け入れられてた」と語る。これを裏返すと、彼は自身のパーソナリティ次第では、差別を受け得たと認識していると言えるだろう。また、N 氏は差別を受けなかった自身の幼少期を「恵まれていた」と語っている。この語りもまた、彼が在日韓国人は学校で差別を受け得る存在であると認識していることを示唆している。差別を受け得るにもかかわらず、差別を受けなかったため、そうした環境を「恵まれていた」と語っていると解釈することが可能である。

露骨な差別は学校だけではなく、職場といった空間でも行われている。これを伝えるのは A 氏の事例である。彼女は職場の先輩から「韓国が嫌いって話をずっと聞かされて」いた。こうした環境が彼女にとって生きづらさとして経験されていたことは想像に難くない。他にも、N 氏は就職活動の際に韓国籍であることを伝えると門前払いされたという経験を語るが、これもまた、就職の場面で国籍を基準とした差別が温存されていることを示唆している。

これらの事例は、現在に残る露骨な差別の存在を伝えるものである。一方で、他の対象者の語りをみると、差別の形がより見えにくく、微細なレベルで再生産されていることも伺える。たとえば、E 氏が小学生の時に「韓国人なんやろ」と言われた経験に象徴されるように、出自を理由にしたからかいや揶揄は依然として存在する。それは暴力的な排除というよりも、「違い」を指摘することで相手を沈黙させるような、日常的で間接的な差別である。E 氏は「弱みを握られたくなかった」と語るが、この言葉には、否定的なまなざしを常に予期しながら生きざるを得ない青年たちの緊張が滲んでいる。

J 氏の事例は、こうした否定的なまなざしが表出した典型例である。彼女は、友人に自身の民族性を開示した際、「え、嫌じゃないん、それ？」と言われた経験を持つ。友人のこの発言をどのように判断するべきかは難しいが、ヘイトスピーチのように民族全体に対する露骨な敵意・悪意を表出したものとは質的に異なるとは言えるだろう。しかしながら、この発言は「在日韓国人であることは『嫌なこと』である」というメッセージを含んでおり、在日韓国人のアイデンティティを毀損し得るものである。

以上の語りから明らかになるのは、在日韓国人青年にとっての生きづらさが、必ずしも常に露骨な差別行為として経験されているわけではないという点である。確かに、学校や職場において今なお暴力的・排他的な差別が存在していることは否定できない。しかし同時に、差別は「起こったできごと」としてのみではなく、「起こり得るもの」として意識されている。差別を受けなかった経験が「恵まれていた」と語られたり、受け入れられた理由が自身の性格や振る舞いに帰属されたりする語りは、在日韓国人であることが常に否定的な評価と結びつき得るという前提が共有されていることを示している。こうした前提のもとで、彼・彼女たち自身の出自の開示の仕方や場面を慎

重に選び、否定的なまなざしを予期しながら日常を生きているのである。現代の在日韓国人青年の生きづらさとは、差別が単純に存在するか否かではなく、差別の可能性を常に計算に入れざるを得ない生活状況そのものにあると言えるだろう。

3.2.2　K-POP の流行と在日韓国人の不可視化

在日韓国人青年の生活には現在もなお生きづらさは存在しているが、一方で、韓流ブームという新たな文脈のなかで「韓国」と接していることも事実である。K-POP や韓国ドラマ、コスメなどの流行によって、韓国文化は「おしゃれ」「洗練された」イメージを伴って日本社会に広く受容された。多くの在日韓国人青年にとって、これはかつて否定的に語られてきた「韓国」が肯定的に評価されるという点で、確かに歓迎すべき変化である。

しかし、その肯定のまなざしは必ずしも「在日韓国人」へは向けられていない。K-POP ファンが称賛するのは「本国の韓国人」であり、日本社会で生きる「在日」はその文脈からしばしば抜け落ちる。このことを明瞭に示しているのが G 氏の事例である。K-POP が社会的ブームとなったことで、G 氏は周囲から「韓国人で羨ましい」と言われるようになったという。しかし、彼女は「私は韓国人じゃない。在日だから」「羨ましがられても嬉しくなかった」と語る。ここには、韓流ブームがもたらす「肯定のまなざし」が、在日韓国人を包摂しない構造への鋭い洞察がある。つまり、ブームのなかで称賛されるのは「韓国人」であり、日本社会で生きる「在日韓国人」ではない。彼女が「K-POP のブームがあっても、なんだかな、って感じ」と述べるのは、まさに自身の存在がその肯定の射程から外れていると感じたからである。

G 氏にとっての「在日韓国人」とは、朝鮮学校に通い、韓国語を話し、チェサを行うような「在日の文化的実践を日常的に生きる人びと」であった。それに対して、韓流ブームのなかで「韓国人」として想定される人びとは、彼女が見てきた在日の生活とは大きく異なる。「韓国語を喋って」と求められたり、流行文化としての韓国性を消費されることは、彼女にとって民族的な誇りではなく、むしろ煩わしいものとして経験された。G 氏の語りは、韓流ブームがもたらす「韓国文化の肯定」が、同時に「在日の不可視化」を促すプロセスでもあることを示している。

この「肯定される韓国」と「不可視化される在日」という構造は、在日韓国人青年に複雑な感情をもたらし得る。一方では、周囲が韓国文化に親しむことに嬉しさを感じながらも、他方で「自分はその韓国人には含まれない」と感じる疎外感である。韓流ブームによって韓国文化が商品化され、「消費される韓国」と「生きる韓国」のあいだに乖離が生じるほど、そこに含まれない「在日」はより見えなくなるという逆説が生じているのである。

このような構造を踏まえると、現代における在日韓国人青年の「生きづらさ」は単なる被差別の問題にとどまらないことが分かるだろう。ここには、差別が減少していると語られ、韓国文化が称賛される一方で、自分たちの存在が語られにくくなることそのものが新たな困難となる、という構造がある。つまり、在日韓国人青年の生きづらさは「否定」ではなく「不可視化」としても現れているのである。

差別の形式が変わり、韓国へのイメージが変化しても、在日韓国人青年は依然として「語られにくい位置」に置かれている。彼・彼女たちの語りは、単純な「差別の有無」を問うだけでは、生きづらさの全貌が把握できないことを明らかにしている。差別が消えたと語られる社会でこそ、在日韓国人青年の声に耳を傾けることが求められているのである。

3.3　民族団体の意義とは何か

在日韓国人青年の語りをたどると、民族団体は社会運動を組織する母体ではなく、個人が社会的関係を再構築し、自らの位置を確認するための空間として機能していることが分かる。青年会や学生会、朝鮮奨学会といった諸団体は、かつては政治的・社会的権利の確立を目的とする組織的運動の担い手であったが、今日の青年たちにとっての意味はそれとは異なる。そこでは、民族的所属を確認するよりも、むしろ「他者とつながる」こと、「誰かの力になる」ことといった関係的実践の場としての性格が強くなっている。

B 氏が「青年会は自分にとって居場所だった」と語るように、団体はしばしば孤立した個人が再び他者と出会い直す契機となる。彼にとって青年会は、喪失した人間関係を補い、社会との接点を回復する場であった。こうした「居場所」としての機能は、B 氏や F 氏の語りにも共通してみられる。彼女たちは職場の先輩からの差別や、恋人の家族からの拒絶といった社会的疎外を経験している。そして、こうした経験は家族には相談が難しく、また、日本人とは共有し難いものとして認識されていた。しかし、青年会に参加することで「在日として受け入れられる関係性」を取り戻し、かつ、「在日だから分かる話題」として、自身の困難を他者と共有している。すなわち、民族団体は社会的排除の経験を癒やし、再び他者と関わるための安全圏として機能している。

もっとも、社会的排除を経験していない人びとにとっても、民族団体は在日韓国人同士が繋がり、安心感を得られる空間となっている。この点を明確に示すのは、I 氏の事例である。彼女は学生会を「心の拠り所」と表現している。彼女は一時的に在日コミュニティから離脱するが、「韓国学校みたいな韓国人コミュニティが恋しくなった」と舞い戻っている。この過程は、民族団体が当事者にとって情緒的な安心感をもたらす機能を有していることを示している。また、青年会を気の置けない親しい友人との

空間として位置づけている K 氏の事例も I 氏と類似のものとして位置づけることができる。もっとも、K 氏の場合、I 氏に比べ「民族」という要素が希薄なのは確かである。民族団体を考える際に、あえて「民族」という観点を省き、「友人関係」の集積した場所として捉えた際、どのような意義が浮かび上がるのか、という点は今後検討の余地があるだろう。

一方で、C 氏の語りに見られるように、民族団体はまた、個人が社会的行為を通じて自らのアイデンティティを「実践」する場でもある。C 氏にとっては、青年会での国民儀礼といった実践が「身体を通して民族を感じる」機会であり、アイデンティティを感覚的に再確認する契機となっている。大学生になるまで自身のルーツを知らなかった彼女にとってこうした実践は、民族性を生き直す場であることを示している。

このように見ていくと、現代の民族団体は、政治的主張の場としてよりも、関係の再生産と感情の共有を媒介する場としての意味を帯びている。そこでは、在日韓国人青年が自らの出自を肯定的に再定義し、社会のなかで生きる力を得るプロセスが展開している。したがって、民族団体の意義は個々人が他者と出会い、その出会いのなかから自身の民族性を確認／再確認する場であるという点にこそあるといえるだろう。

4　結論

本報告書では、全国各地で暮らす在日韓国人青年 15 名への生活史調査をもとに、彼・彼女たちがいかにして「在日韓国人」として生きてきたのか、を描いてきた。そこに浮かび上がったのは、「在日であること」をめぐる一人ひとりの多様な物語である。かつて、在日韓国人の生は「差別と抵抗」「同化と民族」といった二項対立の語りで捉えられがちであった。しかし、今日の青年世代はそのどちらにも回収されない、より複雑で、柔らかいかたちの生を生きている。

彼・彼女たちの語りに共通していたのは、「在日であること」は生まれによって自動的に決まるものではなく、日常の関係や行為のなかで改めて見つめ直される、という感覚である。家庭や友人、そして青年会といった場での他者との出会いが、自分が何者であるのかを確かめる機会となっていた。たとえば、家族のなかでチェサを行う、友人に自分の出自を打ち明ける、青年会で在日の話題を笑いながら語る――こうした何気ない営みの積み重ねを通じて、アイデンティティが形づくられている。民族とは「関係」や「実践」として生きられているのである。

一方で、在日韓国人青年たちの語りは、今なお社会に根づく生きづらさをも照らし出している。差別はかつてのように露骨な形では表れなくなったが、偏見や無理解は依然として存在する。また、近年の韓流ブームがもたらした「韓国人気」も、必ずしも彼・彼女たちの民族的な肯定感に直結しているわけではない。ブームのなかで称賛されるのは、しばしば「本国の韓国人」であり、日本社会で生きる「在日韓国人」ではないからである。社会の好意的な視線が、かえって在日を社会の周縁へと押しやることもある。この「見えない生きづらさ」こそが、現代の在日韓国人青年の新しい課題といえる。

その一方で、多くの語りが示していたのは、「つながり」から生まれる希望である。青年会や学生会といった民族団体は、かつてのような政治的な枠組みとしてだけでなく、仲間と笑い、語り合うための空間としても機能している。「在日の話をしても通じる」「同じような悩みを共有できる」という感覚は、彼らにとって何よりの支えであった。こうした場は、「安心して在日でいられる場所」であり、他の空間では代えがたいものである。ここでは、民族性が強制されるのではなく、互いに異なる経験を持つ者同士が、ゆるやかに結びつきながら共に過ごしている。

本報告書で取り上げた生活史は、特定のモデルを提示するものではない。それぞれの語りは断片的であり、また時に矛盾を含んでいる部分もあるだろう。しかし、その断片のなかにこそ、現代の在日社会が抱える現実と、そこに息づく可能性が見えてくる。差別や不可視化といった困難を経験しながらも、在日韓国人青年は「在日であること」を新しい意味で引き受けようとしている。それは、過去を断ち切ることでも、過去に縛られることでもなく、日常の関係や実践のなかで静かに受け継がれ・生成し

ていくものとしての「在日」である。

この報告書は、そうした個々の声を社会に開く試みである。彼・彼女たちの語りを通して、私たちは「在日」という言葉をもう一度、固定されたラベルではなく、変化し続ける生のかたちとして捉え直すことができるだろう。多様な経験が交錯する現代社会であるからこそ、「在日韓国人とは何か」という問いは「古くて新しい問い」としてその重要性を増しているのである。

補論　「社会調査」における「生活史調査」の位置づけについて

本報告書では「生活史調査（life history research）」という方法論を用いた。本章ではこの調査方法について説明し、本調査で採用した理由を述べる。

結論を先取りすると、生活史法の特徴は長い時間的パースペクティブから対象に接近し、過去から現在までに生じた個人の内面世界の動的過程を把握するのに有効な方法である。「アイデンティティ形成」とは過去から現在に至るまでに生じた自己認識変化の過程であるため、生活史法はこれを把握する有効な方法であるといえる。方法論的議論であるため退屈かもしれないが、本調査の立場を表明するためにもやや詳しく説明する。

1　社会調査の見取り図――量的調査と質的調査

生活史調査の特徴を明確にするためには、社会調査の方法論全体のなかでの生活史法の位置づけを示す必要がある。本節では、社会調査という営みの全体像を提示するために、「量的調査」と「質的調査」について説明する。

社会調査とは、「一定の社会また社会集団における社会事象を、主として現地調査によって、直接に（first hand）観察し、記述（および分析）する過程」（安田・原 1960: 2）であり、大きく「量的調査」と「質的調査」に分けられる。量的調査とはアンケートや観察によって得られたデータを数字に落とし込み、統計的に集計・分析・解釈する調査である。一方、質的調査とは写真、動画、文学作品、観察記録、インタビュー記録といったデータを数字に落とし込まず記述・分析・解釈する調査である。たとえば、何かアンケートを行った際、「はい」、「いいえ」の割合を扱うのが量的調査であり、自由記述欄を扱うのが質的調査であるとイメージしてもらうと分かりやすいだろう。安田三郎は量的調査と質的調査の違いを下記のように整理している。

> 統計的方法（前者）は、①多数の事例についてエキステンシヴに、②少数の側面を全体の中から切り取って、③しかし客観的に計数または計量して、相関係数等の客観的な分析法によって普遍化を行なうのに対し、事例研究法（後者）は、①’きわめて少数の事例について、②'多数の側面を全体関連的にインテンシヴに、③’主観的・洞察的に把握し、これまた主観的・洞察的に普遍化するものである（安田・原 1960: 5）

一般的に質的調査よりも量的調査のほうが科学的であると考えられている。その理由として、質的調査は「選ばれる代表事例の典型性・代表性が保証されないので、普遍的な法則をみちびきだすことが困難である」点と、「分析の過程を標準化しがたく、

不精確な観察や恣意的な推論がはいりこむ余地がおおきい」点が指摘される（奥田 1967: 78）。こうした指摘に対して、社会学者である見田宗介は質的調査の特徴として「諸次元のダイナミックな関係をそのあるがままの姿で示し、生きいきとした具体性と『了解可能性』を保ちうる」点を挙げる（見田 1979: 140）。

また、統計的には「外れ値」と判断されるような極端な事例であっても、質的調査では「『平常な』事例においてはアイマイなままに潜在化したり、中途半端なあらわれ方をしたり、相殺しあっている諸要因が、より鮮明な形で顕在化している」（見田 1979: 160）事例として扱うことが可能である。見田は極端な事例こそ「他の多くの平常的な事例を理解するための、いっそう有効な戦略データ」であると指摘している（見田 1979: 161）。

本稿では量的調査と質的調査の対抗的議論にはこれ以上触れない 。しかし、見田が指摘する「生きいきとした具体性と『了解可能性』を保ちうる」という点を理解するにあたって、社会心理学者である G. Allport の指摘は示唆を与えてくれるものである。長くなるが引用しよう 。

> ジョンという 12 歳の少年がいるとして、彼の家族は貧しいとしよう。彼のお父さんは罪を犯したことがあり、お母さんは彼をうとんじている。そのうえ、近隣の人たちの程度がよくない。そしてこのような条件をもっている少年たちの 70 パーセントが犯罪者になるとしよう。さすれば、70 パーセントの可能性でジョンが犯罪者になるといえるのであろうか。とんでもない。ジョンは彼固有の遺伝的素質をもっており、また彼の生活経験は、彼独自のものだ。彼固有の世界には、統計学者には知られていない影響因子群が含まれているのだ。たとえば、ある学校の先生との人間的な絆とか、心の支えになることばを近所の人がいったとか。そういう要因が決定的なものになり、統計上の平均的な可能性の全てをひっくりかえしてしまうのだろう。70 パーセントの可能性、なんてジョンにはないのだ。彼は将来において非行を犯すかもしれないし、犯さないかもしれない。それは彼のパーソナリティや彼の現在や将来にわたる環境を十全に知ってこそはじめてたしかな予想がたてられるものなのである」（Allport 1962 : 411-412）

「人間的な絆」や「心の支え」といった感受性にまつわる語彙は非科学的だという印象を与えるかもしれない。しかし、人間は感受性によってものごとを判断することもしばしばある（鳥越 1989: 24）。こうした事実を踏まえ、本調査では対象の感受性や主観に注目する立場を採る。なぜなら、アイデンティティ形成という心理的過程を扱う本稿において、感受性の次元を無視することはできないからだ。

以上のように、質的調査は人びとの感情や他者との関係性を含む「生きられた現実」を把握するのに適した手法である。本調査も、まさにそのような立場から、在日韓国

人青年一人ひとりの語りに耳を傾けたものである。

2　生活史調査の特徴

「生活史調査」とは質的調査の方法論の 1 つである。「生活史」とは「個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録」（谷 1996: 4）であり、「生活史調査」は口述史や日記、自伝といった生活史を記述・分析する方法である。

質的調査全般に対する批判があるように、生活史調査に対しても「非科学的な性質」を有しており、「今までにどのような主たる技法上の進歩も見せていない」という指摘がある（Easthope 1974=1982: 125）。G. Easthope は 1970 年代の段階で、生活史法は社会学的方法としては衰退していると指摘する（Easthope 1974=1982: 109）。

しかし、生活史法にも特有の強みがある。1 つは、生活史法が長い時間的パースペクティブから対象に接近する点だ（谷 1996: 11）。「個人の一生の記録」を用いる生活史調査は、「個人」を対象とする方法論としては最も長い時間的パースペクティブを有しているといえる。「アイデンティティ形成」という生涯に亘って展開される動的過程を捉えるにあたって、長い時間的パースペクティブからのアプローチは有効だと考えられる。

生活史調査のもう 1 つの特徴は長い時間的パースペクティブという点から導き出される。それは、「異文化理解」に有効な方法だという点だ（谷 1996: 14）。長い時間的パースペクティブを持つ生活史調査は、特定の他者の理解を通じて、その他者が置かれている異文化の理解に貢献すると考えられる。

しかし、ここで注意しなければならないのは、「他者理解」や「異文化理解」は予見される自他の異質性を予定調和的に確認することではない、ということだ。社会学者の水野節夫が「われわれが抱きがちなステレオタイプ化された人間像とか勝手な思い込みを打ち砕いていく可能性を生活史調査は秘めて」いると指摘するように（水野 1986: 154）、ステレオタイプには収まらない一面を捉えることこそ生活史調査の醍醐味だといえる。

したがって、本調査で生活史調査を採用したのは、在日韓国人青年がどのように時代や社会との関係を紡ぎ直しているのか、その内面の動きを長い時間軸のなかで理解するためである。生活調査は、統計では測り得ない「在日韓国人として生きる」ことの文脈を照らし出す有効なアプローチであるといえる。

[注]補論の内容は以下の論文の一部を加筆・修正して転載したものである。
木下佳人，2021，「『ポリティカル・コレクトネス』を超えて――生活史から考える在日朝鮮人のアイデンティティ形成」『アレ』10: 162-203.

[文献]

Allport, G.W., 1962, "The General and the Unique in Psychological Science," *Journal of Personality*, 30(3): 405-22.

G. Easthope, 1974, *A History of Social Research Methods, London, Longman Group Limited*.（＝川合隆男・霜野寿亮監訳，1982,『社会調査方法史』慶応大学出版会.）

見田宗介，1965,「『質的』なデータ分析の方法論的な諸問題」『社会学評論』15(4): 79-91.

水野節夫，1986,「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修・宮島喬編『ライブラリ　社会学=10　社会学の歴史的展開』サイエンス社，147-208.

奥田道大，1967,「データ蒐集の技法（Ⅱ）」福武直・松原治郎編『社会調査法』有斐閣.

谷富夫，1996,「序論　ライフ・ヒストリーとは何か」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社，3-28.

鳥越皓之，1989,「経験と生活環境主義」鳥越皓之編『環境問題の社会理論――生活環境主義の立場から』御茶の水書房，14-53.

安田三郎・原純輔，1960,『社会調査ハンドブック〔第 3 版〕』有斐閣.

在日韓国人青年生活史調査　中間報告書

2025年12月　初版第1刷発行
企　　画　在日本大韓民国青年会中央本部
監　　修　木下佳人
研究協力　金田康佑、肥後栞奈、中川咲恵、柳川大貴
発 行 人　李将浩
発 行 所　在日本大韓民国青年会中央本部
〒106-0047
東京都港区南麻布1-7-32　韓国中央会館別館
TEL/03-3453-0881　FAX/03-3453-2326